

センタ－模擬試験

第6回

国語

解説と解答

【解答・採点基準】

(国語)

(200
点満点)

第2問	第2問							第1問	第1問							番号題					
	問6	問5	問4	問3	問2	問1	(ウ)	(イ)	(ア)	問6	問5	問4	問3	問2	問1	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)	
自己採点小計	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番解号答
⑥ ④ ※	③	④	①	⑤	①	③	②			②	②	②	⑤	④	③	①	②	④	④	⑤	正解
(50)	5	5	8	8	8	7	3	3	3	(50)	4	4	8	8	8	2	2	2	2	2	配点
																				自己採点	

第4問	第4問							第3問	第3問							番号題		
	問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1		問6	問5	問4	問3	問2	問1	(ウ)	(イ)	(ア)	
自己採点小計	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21		番解号答
自己採点小計	①	⑤	③	①	①	④	②	②	④	⑤	①	③	②	⑤	②	④		正解
(200)	(50)	8	8	6	6	6	6	5	5	8	7	8	7	5	5	5	5	配点
																		自己採点

※の正解は順序を問わない。

【解説】

第1問 現代文

【出典】

宇野重規『民主主義のつくり方』（筑摩選書、二〇一三年）の第2章「近代政治思想の隘路」1「閉じ込められた自己」の一節。設問の都合上、省略した箇所がある。

宇野重規（うの・しげき）は、一九六七年生まれの政治学者。専門は政治思想史、政治哲学。「デモクラシーを生きる—トクヴィルにおける政治の再発見」、「政治哲学へ—現代フランスとの対話」（渋沢・クローデル賞ルイ・ヴィトン特別賞）、『トクヴィル 平等と不平等の理論家』（サントリリー学芸賞）、『（私）時代のデモクラシー』などの著書がある。

【本文解説】

近代政治思想が近代特有の人間像に基づいていることを論じた文章。リード文に示したように、本文は、「いつの頃からか、政治において語られる個人のイメージは、かなり独特なものになつたようだ。」という書き出しで始まる章の一節である。本文では、この「独特」さがチャールズ・ティラーの「緩衝材で覆われた自己」を引用しつつ説明されている。まず、この点について筆者が何を問題にしているのかを補足的に説明しておこう。

一般に、近代において重視されるのは、主体性を備えた自律的な個人である。政治においては、諸個人が合意することによって結びつき、民主主義が成立する。（たとえば「選挙」を思い浮かべてみるといいだろう。）だが、そうした個人が「自己の厚い壁のうちにこもつた個人」だという点が問題なのである。つまり、筆者によれば、他者と関わり合うことに極度に消極的な個人が、何とか他者との共存をはかるための論理を模索してきたのが「近代政治思想史」である。だからこそ、近代政治思想が行き詰まりを見せ、「民主主義への不信が募っている」と考える筆者は、本文末にあるように、「緩衝

材で覆われた自己」を再検討する必要があると考えるのである。

本文全体の流れを説明すると、次のようになる。（本文の構成については、本文全文参照）

【設問解説】の問6(ii)でも説明する。

前半では、近代特有の人間像を「緩衝材で覆われた自己」と表現したティラーの思想が紹介されている。ティラーは、この「内面に撤退した自己」に基づいて「世俗化」を定義づけた。

後半では、こうした近代の人間像に基づいて「近代政治思想」が形成されたことが論じられる。近代の人間像の「内面と外面の分離」の発想によつて政治は宗教から自立し、さらに政治の概念は近代の人間像に支えられた人権の理論によつて意味づけられることになった。

本文は二十九の形式段落からなるが、以上のように、前半を①第1段落～第14段落（冒頭～「ティラーはいう。」）、後半を②第15段落～第29段落（「このようなティラーの」～本文末）として説明していこう。

① ティラーの「緩衝材で覆われた自己」

ティラーによれば、近代において人間像は変化し、「孔だらけの自己」から「緩衝材で覆われた自己」へと変化したという。（ティラーが近代的な自己について語るのは、「世俗化」を論じるためなのだが、「世俗化」については後で確認しよう。）（第1～3段落）

1 「緩衝材で覆われた自己」とは何か

「孔だらけの自己」とは何か。たしかに人間の身体には目や鼻や口などたくさんの「孔」があるが、ティラーのいう「孔だらけ」は比喩であり、〈外部からの影響を受ける〉という意味である。自分の外に「強力かつ重要な精神的存在」（たとえば「神」）があり、その影響が自分の中に浸透ってきて、精神や身体に直接作用する。このように、「孔だらけの自己」は外からの影響に左右されやすい存在である。（第4・5段落）

では「緩衝材で覆われた自己」とは何か。まわりを「緩衝材」で覆われているため、この自己は外界に直接さらされない。そして、外に対しても「距

離」をとることで、外界と隔てられた「内面」が形成される。（「内面」とは〈外から見えない心〉のことだと理解すればよいだろう。）

そしてこの場合、自分の外にある「神」ではなく、その「内面」が「自分にとつてのあらゆる意味の源泉となる」。つまり、たとえば自分がどのように生きるかは「神」が決めるのではなく、自分の心が決めるのである。（以上、第6段落）

以上のような変化は、「人間の内と外との関係をめぐる感覚の変質」と言つてもよい。外から影響を受けやすい「孔だらけの自己」は、内と外の境界が不明確だが、近代の「緩衝材で覆われた自己」は、内面と外面が分離している。（この変化については、【設問解説】の問2でも説明する。）

自ら別の場所に移動することによって可能になる「経験」とは異なり、「緩衝材で覆われた自己」は、「内面」に閉じこもり、そこから世界をうかがい、操作しようとする。そのように外界を制御下に入れることができ「自律」であり「自由」なのだ。このように、近代の人間の特徴として抽象的に語られがちな「内面性」や「自律性」を、ティラーは「内と外との関係」から捉えたのだ。（以上、第7～10段落）

2 内面に撤退した自己と「世俗化」

そして、ティラーは、「世俗化」を「内と外との関係」をめぐる自己イメージの変質によって定義する。第2・3段落にあるように、一般に、近代世界の特徴は「世俗化」であり、それは宗教的なものが後退する「脱宗教化」だと考えられている。（たとえば、「神」中心の世界が、近代になつて「人間」中心の世界になつた、という理解である。）だが、ティラーはこうした「世俗化」の定義に異議を唱える。（第11段落）

ティラーの「世俗化」の定義は、簡単に言うと次のようなものだ。「孔だらけの自己」の場合は、外からの精神的影響を受けてしまうから、「神」を信じるしかない。つまり「不信仰」という選択肢は事実上存在しない。だが、「内面」へと撤退した「緩衝材で覆われた自己」の場合は、外からの影

響を受けずに済むから、（「神」を信じることもできるが）「神」を信じないという選択肢も選べる。つまり、自分の「内面」に従つて生きることが可能なのである。（第12・13段落）

だとすれば、「世俗化」は、宗教が後退したのではなく、「不信仰」という選択肢が社会的に承認され、個人がそれを選べるようになつたということなのだ。言うまでもなく、その個人とは、内面と外面が分離された「緩衝材で覆われた自己」である。（ティラーの「世俗化」については、【設問解説】の問3でも説明する。）（第14段落）

①のティラーの議論の内容を整理しておこう。

〈近代以前〉
「孔だらけの自己」

- ・内と外の境界が不明確
- ・外からの影響を受けてしまう
- ・「不信仰」を選べない

⇒

〈近代〉
「緩衝材で覆われた自己」

・内面と外面の分離

- ・内面に閉じこもつて、外界を操作する
- ・「不信仰」を選べる（＝「世俗化」）

② 「内面と外面の分離」に基づく近代政治思想

以上のように、ティラーは、近代的自己のイメージを「緩衝材で覆われた自己」と表現し、それが近代という時代に特有のものであり、普遍的な真理ではないと洞察した。そして、ここから筆者は、「緩衝材で覆われた自己」が近代の政治思想の基盤となつたことを論じていく。（第15・16段落）

1 「政治の自立化」

ヨーロッパにおける宗教改革に端を発する宗教内乱において、宗教上の対立は政治的対立を招いた。宗教が政治を揺るがしてしまうのだ。そこで、政治を宗教から切り離す必要が生まれ、「政治をもつぱら人間の外面に関わる事柄を扱うものとして限定する」という方針が打ち出された。これが「政治の自立化」である。（第17・18段落）

近代以前は、じつは宗教と政治はいずれも人間の内面や外面に明確に切り分けられるものではなかった。宗教には、身体性という外面と結びつく儀礼や、人間の外部に現れる「聖なるもの」と結びつく信仰があった。政治は、古来、人間の内面的価値である自由や人間性と強く結びついていた。

だが、近代になって、「政治の自立化」をいち早く主張したマキアヴェリは、政治を人間の外面にのみ関わるものとし、宗教改革者であるルターは、宗教を人間の内面的事柄として純粋化した。二人が同時代人であることは偶然ではない。なぜなら、近代の「緩衝材で覆われた自己」によって成立した「人間を内面と外面に分離できる」という考え方を前提にして、はじめて宗教と政治が分離されたからだ。だから、「内面と外面の分離」という考え方を強化したという意味で、「見異質に見えながらも同じ役割をはたした二人は、まさしく「コインの表と裏」のような関係にある。（以上、第19～22段落）

2 やせ細った政治の概念

だが、ここで問題が生じる。「政治の自立化」によつて宗教などの内面的価値から切り離された政治は、政治の目的を見失い、皮肉にも、政治の存立の基盤が揺らいでしまったのだ。これでは政治の「自立」どころか、政治の存立が危ぶまれる。（第23・24段落）

そこで、近代政治思想は次のような展開を見せる。「社会契約論」に見られるように、政治の概念を「人権の理論」によって意味づけようとする動きが生まれたのだ。これは、「政治の自立化」によつて生じた問題を、「人権に

よる正当化」によつて「補完」して解決しようとするものである。（この点

は【設問解説】の問4で詳しく説明する。）（第25段落）

ただし、「社会契約論」も「緩衝材で覆われた自己」と深くかかわっている。なぜなら、「人権の理論」の中核となるのは「所有権の理論」だが、それは「自分の精神が自分の身体を所有し、好きなように処分できる」という考え方によつて支えられているからだ。この考え方の前提に、「内面」に撤退し、外界を操作する自己」というイメージがあることは言うまでもない。

（第26・27段落）

ここで、②の議論の流れを整理しておこう。

近代政治思想の展開

政治（外面）が宗教（内面）から自立すると、
（Ⅱ）内面と外面の分離>が前提となる

→
政治の基盤が揺らいだため、

←
「人権の理論」による正当化が必要になった。

（Ⅱ）内面に閉じこもつて、外界を操作する自己>が前提となる

このまとめを通してとくにしつかり確認してほしいのは、近代政治思想の前提となるのが、あくまでも「緩衝材で覆われた自己」という近代的自己のイメージだということである。（この点は【設問解説】の問5で詳しく説明する。）（第28段落）

その上で、最後の筆者の言葉を理解してほしい。だからこそ、近代政治思想が行き詰まっている今日、「緩衝材で覆われた自己」をも再検討しなければならない。近代的自己のイメージを自明視してはならないのである。こうした問題意識から、筆者は「緩衝材で覆われた自己」とは何か、そしてそれが近代政治思想とどのように関わっているか、を論じたのである。（最終段

落）

【設問解説】

問1 漢字の問題

(ア)は、〈最も重要なこと〉という意味の「肝心」(腎)。①「陣中」見舞
（＝戦闘中の将兵の労苦をねぎらうこと。多忙な状況にある人を激励すること）、②「仁義」（＝道徳上守るべき筋道）、③「理不尽」（＝道理に合わないこと）、④「迅速」（＝物事の進み具合が非常に速いこと）」、⑤「用心」（＝心をくばること。万一に備えて注意すること）」で、⑥が正解。

(イ)は、〈軍隊などが陣地を引き払って退くこと〉という意味の「撤退」。

①「摘記」（＝要点を抜き書きすること）、②「徹頭徹尾」（＝最初から最後まで）、③「鉄則」（＝変えることのできない規則）、④「撤回」（＝いったん提出したものを取り下すこと）」、⑤「敵機」（＝敵の飛行機）で、④が正解。

(ウ)は、〈もとに戻すこと〉という意味の「還元」。「還元」は、ここでの文脈のように〈複雑なものを単純化する〉という意味でも用いられることを覚えておこう。ちなみに「換言」は〈別の言葉で言いかえること〉である。

①「完遂」（＝最後までやりとげること）、②「一環」（＝互いに密接な関係をもつものの一部分）、③「等閑」に付す（＝いいかげんに扱う）、④「還暦」（＝六十年で再び生まれた年の干支にかかることから、数え年六十一歳のこと）、⑤「召喚」（＝人を呼び出すこと）」で、④が正解。

(エ)は、〈物事を観察して本質を見抜くこと〉という意味の「洞察」。①「主導」（＝中心となつて他を導くこと）、②「空洞」（＝内部ががらんどうになっていること）、③「微動」（＝かすかに動くこと）」、④「異同」（＝異なるっているところ。違ひ）」、⑤「道楽」（＝本業以外のことに対する樂むこと）」で、②が正解。

(オ)は、〈正統から外れていること〉という意味の「異端」。①「発端」（＝物事の始まり）、②「探求」（＝あるものを得ようとして探し求めること）、③「嘆息」（歎息）（＝悲しんだりがっかりしたりして、ため息をつくこと）」、④「短慮」（＝考えがあさはかなこと）」、⑤「簡単」（＝物事が大

ざつぱで単純なこと）」で、①が正解。

問2 近代以前から近代への自己イメージの変化を確認する問題

【本文解説】①で見たように、ティラーにとって、近代以前から近代への人間の自己イメージの変化は、「孔だらけの自己」から「緩衝材で覆われた自己」への変化である。筆者は、ティラーがこれを「人間の内と外との関係をめぐる感覚の変質」として説明している点が「ユニーク」だと言う。以上が傍線部付近の文脈である。この設問では、自己イメージの変化の内容を「内と外」の「感覚の変質」という観点から考えればよい。

それが説明されているのが第3段落から第10段落である。範囲が広いので内容をつかむのは容易ではないが、とくに「孔だらけの自己」を説明する第4・5段落と、「緩衝材で覆われた自己」を説明する第6・9段落に着目してほしい。まとめると次のようになる。

〈近代以前〉（第4・5段落）

〔孔だらけの自己〕

a 内と外の境界が不明確になつてゐる

b 心身ともに外からの影響を受ける

← 変化

〈近代〉（第6・9段落）

〔緩衝材で覆われた自己〕

c 外界から内面が切り離されている

d 内面に閉じこもつて、外界を操作する

したがつて、〈a bから、c dへと変わった〉という形で説明している

③が正解である。

①は、全体として誤り。「外部へと働きかけることのできる身体性」はaやbに合致せず、「孔だらけの自己」の特徴ではない。また、「抽象的な意味での内面性や自律性」もcやdに合致せず、「緩衝材で覆われた自己」

の特徴ではない。

②は、「〔緩衝材で覆われた自己〕から「孔だらけの自己」へ変化した」という内容。これだと、変化前と変化後が逆さまになるので誤り。

④は、「外界を自由に移動しつつ」や「経験を積む」が**a**や**b**に合致せず、ここで「孔だらけの自己」の特徴とは言えないでの誤り。「経験」は第8段落で「緩衝材によって覆われた自己」と対比的に並べられているが、この本文では「移動」することが「孔だらけの自己」の特徴として挙げられているわけではない。

⑤は、「内と外が分断された自己」が**a**に反するので誤り。

問3 テイラーアの「世俗化」の定義を確認する問題

この設問では、テイラーアが「世俗化」をどのように理解したのかを考えればよい。まず言葉の意味を確認しておこう。「俗」とは、人間が生きるこの世界のことを意味する。(対になるのは、宗教的な世界を指す「聖」である)こうした語義からもわかるように、近代における「世俗化」とは、世界の「脱宗教化」(「神」中心から「人間」中心への移行)のことだと理解されている。だが、傍線部にあるように、テイラーアはこうした一般的な理解を否定する。

ではテイラーアの「世俗化」とは何か。結論から言うと、「世俗化」は、宗教の後退ではなく、「不信仰」という選択肢を選べるようになつたことである(第14段落)。そもそもテイラーアが「緩衝材で覆われた自己」を考察したのは、「世俗化」を論じるためだ。第12段落・第13段落には、「不信仰」を選べる仕組みが次のように説明されている。

近代以前の「孔だらけの自己」は、外からの精神的影響を受けてしまうから、「神」を信じるしかないので、「不信仰」という選択肢は事実上存在しない。それに対して、「内面」へと撤退した「緩衝材で覆われた自己」は、外からの影響を受けずに済むから、「神」を信じないという選択肢も選べる。つまり、すべての意味は自分の「内面」にあると信じて「内面」

に従つて生きることが可能である。

念のため、論点を整理しておこう。

〈近代以前〉(第12段落)

「孔だらけの自己」

- a 自分の外にある強力な精神的存在の影響を受けてしまう
- b 「神」に従つて生きるしかない
- c 「不信仰」という選択肢がない

→「世俗化」

〈近代〉(第13段落)

「緩衝材で覆われた自己」

- d 内面に閉じこもつて、外界を操作する
- e 「内面」に従つて生きることができる
- f 「不信仰」という選択肢を選べる

したがつて、「世俗化は、「脱宗教化」ではなく、**a**が**e**へと変化したことだ」という形で、「不信仰」という選択肢を選べるようになつた)点を説明している④が正解である。

①は、「信仰を持たないという選択肢が事実上存在せず」が**f**に反するので誤り。

②は、「自分の外にある重要な精神的存在の影響を受けつつ」が「孔だらけの自己」の説明であり、**e**や**f**に反するので誤り。

③は、「「不信仰」を選ばざるをえず」が**f**に反するので誤り。「不信仰」を選ばざるをえないと「不信仰」を選べるということは異なるので注意しよう。テイラーアは、「近代では、神を信じることもできるし、信じないこともできる」と言っているのである。だから、「私的な領域から宗教を排除してしまう」も誤りである。

⑤は、「神」を「外界から切り離された内面に存在するものとして信じ

ることができる」が本文のどこにも書かれていない内容なので誤り。

問4 近代の政治思想のあり方を確認する問題

この設問では、傍線部の意味内容が問われている。傍線部の「最初のベクトル」は、第18段落にあるように、宗教内乱を背景に、「政治を人間の外に関わる事柄を扱うものとして限定し、宗教から切り離す」こと、すなわち「政治の自立化」である。「第二のベクトル」は、傍線部直前から、「政治の概念を、所有権を中心とする人権の理論によって意味づける」ことだとわかる。

それでは、傍線部の「最初のベクトル」が「第二のベクトル」によって補完された」とはどういうことか。第23段落・第24段落に着目すると、「政治が宗教から自立し、政治の概念から内面的価値が切り離されたことで、政治の存立の基盤が揺らいだ」という事情が見えてくる。つまり、「最初のベクトル」によって政治の概念が「やせ細ってしまった」から、「第二のベクトル」によってそれを補完ざるを得なくなつたのである。この流れを大きくまとめると、次のようになる。

a 「最初のベクトル」（政治の自立化）

政治を外面にのみ関わるものと見なし、宗教から切り離した

b 「やせ細ってしまった政治の概念」

内面的な価値が切り離され、政治の基盤が揺らいだ

c 「第二のベクトル」

人権の理論による正当化が必要になつた

以上から、 $\langle a \rightarrow b \rightarrow c \rangle$ を説明している⑥が正解である。

なお、【本文解説】②で見たように、「政治の自立化」は、「緩衝材で覆われた自己」における「内面と外面の分離」が前提となる。古来、政治も

宗教も、内面や外面に明確に切り分けることのできないものだつたが、内面と外面の分離が成り立つようになったからこそ、マキアヴェリとルターに見られるような「政治は外面、宗教は内面」という割り振りが可能になつたのだ。⑥の「人間の内面と外面とが切り離して捉えられ」は、こうした事情をふまえている。

また、「人権の理論」の中心にある「所有権の理論」の前提となるのは、「自分の精神が自分の身体を所有する」という発想、つまり「内面」に撤退し外界を操作する自己であることは、【本文解説】②で見たとおりである。⑥の「自己を端緒とする人権の理論」はこうした事情をふまえている。

①は、「政治が共同体から解放され」がaに反する。政治は共同体ではなく、宗教から自立したのである。また、cの「人権」についてもまったくふれられていない点も物足りない。

②は、「世俗権力から独立し」がaに反する。政治はむしろ宗教から自立して、純粹に「世俗権力」に属するものになつたのである。さらに、「宗教などの内面的価値によって」も、cに反する。「人権の理論」は「宗教」とは無関係である。

③は、「人間の外面的価値によって再び意味づけざるを得なくなつてしまつた」が、cに反する。「人権の理論」が「外面的価値」であるとは本文のどこにも書かれていない。

④は、政治が「人間の内面的事柄として純粹化」されたという点がaに明らかに反する。また、「人間性に基づいた人権の理論」もcに反する。第22段落に、政治は古来「人間性を開花させるためのもの」と見なされてきたと書かれているが、近代政治思想の「人権の理論」が「人間性」に基づいているかどうかは、本文から判断できない。

問5 近代の自己イメージや政治思想についての筆者の考え方を確認する問題

傍線部で言われているのは、「緩衝材で覆われた自己」は近代政治思想

にとつて重要だ」ということである。設問の条件どおり「本文全体の内容にてらして」、ここで筆者がどういふことを言つてゐるのか、を考えよう。本文において筆者は、近代政治思想の展開においてティラーの言う「緩衝材で覆われた自己」が大きな役割を果たしていることを論じてゐる。問4で確認したように、まず、近代的自己のイメージにおいて「内面と外面の分離」が成立したこと、政治が宗教からの自立を果たせたという事情がある。さらに、それによつて基盤が揺らいだ政治を「人権の理論」によつて正当化しようとする政治思想（「社会契約論」）が現れるが、その「人権の理論」もじつは「内面と外面の分離」を前提にした「所有権の理論」によつて支えられているのだ。このように、近代政治思想の前提となるのは、あくまでも「緩衝材で覆われた自己」という近代的自己のイメージである（a）。

そして、最終段落では、近代政治思想が行き詰まつてゐると考える筆者は、近代政治思想を根底から支えてきた「緩衝材で覆われた自己」をも再検討しなければならないと述べてゐる。ここからは、近代的自己のイメージを絶対化してはならない（b）という筆者の考えが読み取れるだろう。このことは、第15段落の「緩衝材で覆われた自己」とは歴史的に生み出された一つの装置であり、けつして時間を越えた自明の真理ではないといふ彼（＝ティラー）の洞察は、重要な意味をもつ」からもわかるはずだ。このように、【本文解説】の最初でも説明したが、筆者は近代政治思想を問い合わせるために、その基盤となつた近代的な自己イメージを再検討しようとしているのである。したがつて、aとbを説明している②が正解である。

①は、「古来、人間の内面的価値にのみ関わるものであつた政治」が、本文から読み取れない。第22段落には政治が「人間の内面的価値」と切り離せなかつたことが説明されているが、「内面的価値にのみ関わる」とは本文のどこにも書かれていない。近代以前は内面と外面が分断されていなかつたのだから、第21・22段落に書かれているように、宗教も政治も、人

間の内面や外面に明確に切り分けられるものではなかつたと理解すべきだろう。また、この選択肢にはbの内容が書かれていないので、筆者の考え方の説明として不十分である。

③は、「内面と外面が相互浸透を通じて」が誤り。内と外の相互浸透は、近代以前の「孔だらけの自己」の特徴である。

④は、「解決しがたい矛盾」が本文のどこからも読み取れない内容であり、誤り。問4で見たように、筆者は、政治を宗教から切り離す「政治の自立化」という「最初のベクトル」が、政治の概念を「人権の理論」によつて正当化するという「第二のベクトル」によって「補完された」と述べ、いずれの「ベクトル」も近代的な自己イメージが前提となつてゐることを指摘してゐるが、それらが「矛盾」であると捉えてはいないのである。

⑤は、「世界との一体化が果たされてゐた前近代的な世界観を復活させるため」が本文のどこにも書かれていない内容であり、誤りである。

問6

(i) 表現の特徴を確認する問題

選択肢の内容を一つずつ吟味していく。

①は、「文末表現」によつて「文学的なスタイルが確立されている」という点が誤り。そもそも本文は筋道立てて明快に書かれた評論である。「文末表現」の強弱によつて「文学的なスタイル」が目指されているとは言えないだろう。

②は、筆者がティラーの「緩衝材で覆われた自己」や「孔だらけの自己」といった表現を用いて、抽象的な議論になりがちな「近代における自己イメージの変化」という内容を巧みに読み手に伝えてゐる点に合致する。「内面と外面の分離」といった内容も、自分が「緩衝材」で覆われているとイメージすると理解しやすくなる。

③は、「外来語」によつて「前後の文脈への注意が喚起され」るといふ

点が誤り。読み手は外来語があるからといって、「前後の文脈」に注意するわけではない。

④は、「世俗化」が「印象的な比喩」だという点が誤り。問3で説明したように、「俗」とは人間が生きるこの世界のことであり、「世俗化」は一般に〈世界の脱宗教化〉を意味し、「比喩」とは言えない。以上から、②が正解である。

(ii) 文章の構成を確認する問題

この本文は、【本文解説】の最初にまとめたように、〈ティラーの「緩衝材で覆われた自己」〉を説明した部分（①第1段落～第14段落）と〈近代政治思想と「緩衝材で覆われた自己」との関わりを論じた部分（②第15段落～第29段落））の大きく二つに分けることができる。

まず①では、筆者は、ティラーが近代特有の人間像を「緩衝材で覆われた自己」と表現したことを示し、「緩衝材で覆われた自己」においては〈内面と外面の分離〉がなされていることに着目する。

次に②では、筆者は、こうした近代の自己イメージの〈内面と外面の分離〉によって政治が宗教から自立し、さらに政治の概念がやはり近代の自己イメージに支えられた「人権の理論」によって意味づけられたことを論じ、「緩衝材で覆われた自己」が「近代政治思想」の基盤であることを示す。

つまり、〈前半である①の議論を前提として、後半である②で議論が展開される〉のである。こうした構成を説明している②が正解である。

①は、「冒頭で本文全体の結論が提示され」が誤り。冒頭ではティラーが「世俗化」を論じたことや「緩衝材で覆われた自己」という表現を用いて近代における人間像の変化を説明していることが示されている。右に述べたように、これは本文全体の結論ではなく、議論の前提となる部分である。

③は、「議論の中盤でそれまでの内容が覆される」が誤り。本文のどこ

にも「それまでの内容が覆される」ところは見あたらない。

④は、「三つの話題が並列的に提示され」が誤り。「話題」としては、「緩衝材で覆われた自己」→「世俗化」→「近代政治思想」の三つをつかむことは可能だが、筆者はこれらを「並列的に」提示しているわけではない。むしろ「緩衝材で覆われた自己」が「近代政治思想」の基盤となるというような密接な関わりがあることを示しているのである。

第2問 現代文

【出典】

井伏鱒二「増富の谿谷」。初出は『オール読物』昭和一六年一月号。今回の本文は、講談社文芸文庫『晩春の旅／山の宿』（一九九〇年）によつたが、途中、一部省略している表現がある。

井伏鱒二（いぶせ・ますじ）は、広島県生まれの小説家（一八九八—一九九三）。福山中学、早稲田大学予科を経て、早稲田大学文学部に入学したが、三年生で中退。二十五歳のときに「幽閉」（後に加筆され「山椒魚」と改題）で、小説家としてデビューする。その後『ジョン萬次郎漂流記』で直木賞を受賞した。主な作品に『本日休診』『黒い雨』『珍品堂主人』など。二〇一二年の大学入試センター試験本試では、この作者の初期の短編「たま虫を見る」からの出題があった。

【本文解説】

本文は、紀行文のようでもあり、怪談のようでもある。そして、作者である井伏鱒二自身の体験にもとづいているような体裁をとつており、その意味では私小説風の短編だともいえる。まずは本文を場面に即して三つの部分に分け、それぞれの部分の概略を見ていくことにしたい。

① 増富の谿谷での「私」の体験（冒頭～49行目）

「私」は数年前に、釣師の佐藤垢石老に連れられて増富の谿谷に赴いた。谿谷を流れる川の上流にある宿に一泊し、翌日、同じ路を通つて山を下る。その帰り路で「私」は、二つの印象的な体験を味わつた。

一つめの体験は、「大きな胡桃の木」を見たことである（7～20行目）。

の胡桃の木を見たとき、「私」は「不可解なような気持」を感じた。それは、単にこの木がとても大きいからという理由だけではなく、「昨日この山路を来るとき、なぜこんな珍しい大きな木に気がつかなかつたろう」と思ったからであった。

「私」と垢石老は、前日に同じ路を登つてきていた。そして問題の胡桃の

木は、「下枝」が大きく「垂れさがつて、道にかぶさつている」のだから、歩いていてこの木に「気がつかない筈がない」。にもかかわらず、「私」も垢石老もそろつて、木の存在にまったく気づかなかつたのである。

これは「私」たちにとつては、かなり不可解な、そしてやや気味悪くもある体験だつたにちがいない。20行目には「不図、垢石老は後を振向いた。私も振向いたが誰もいなかつた。」とあるが、この一行は、そうした不安な雰囲気を強調しているとも考えられる。

そしてもう一つの体験は、「二人の娘」に出会つたことである（26～49行目）。娘たちは、一人は「二十ぐらい」、もう一人は「一つ二つぐらい年下」に見えたが、「二人とも、あまりに美しかつた」ため、「私たちは立ちどまつた」ほどであった。娘たちも立ちどまつてお辞儀をしてくれたが、二人が黙つて行きすぎようとしたとき、「私」は「何か、尊いものが消え失せて行つているかのよう」感じて彼女たちを呼びとめ、バスの乗場への路をたずねてみる。すると娘たちは、落ちついた口調で、バスの乗場までの路を教えてくれたのである。

ここで45行目を見ると明らかだが、実は「私」は、「バスの乗場を知つていながら」娘たちにそれをたずねてゐる。なぜ「私」がそんなことをしたのかは本文に明記されていないが、美しい娘たちに心惹かれ、彼女たちと話をしたかったからと考えるのが、無難な解釈であろう。

娘たちの姿が見えなくなつた後、「私」と垢石老は、彼女たちの美しさについて語り合う。この部分については、【設問解説】の問3で詳しく説明することにしたい。

② 村松氏の話と、それを聞いた「私」の驚き（50～87行目）

数年後、「私」は村松梢風氏と会つた。すると、どちらからともなく増富の谿谷の話になり、村松氏が、二十数年前にその谿谷に行つたときの話をはじめる。

そして話が進むうち、「私」は「驚き」を感じ（70行目）、さらに「何か寒

気のようなもの」まで覚えることになった（79行目）。村松氏が二十数年前に谿谷で体験していたことと、「私」が数年前に同じ場所で体験したことが、

「そつくり同じ」だったからである。帰路の途中で大きな胡桃の木を見つけ驚いたが、往路ではその木の存在に気づいていなかったこと。やはり帰路に、美しい二人の娘と出会ったこと。しかも娘たちと出会った場所も、娘たちの背格好も、さらには彼女たちの背負っていた籠の中身まで、申し合わせたように一致していたのである。

ここで注意してほしいのは、村松氏が嘘うそをついているとは考えられないということだ。もし話が「私」の主導で進み、村松氏がつねに後から話についているのだとすれば、氏が「私」の言うことに合わせて嘘をついていたという可能性は出てくる。しかし本文を読めばわかるとおり、話はつねに村松氏の主導で進んでいる。つまり「私」の立場に立てば、自分しか知らないはずのことを村松氏が知っていたということになるわけだ。「私」が「驚き」や「寒気のようなもの」を覚えることになった要因は、こうしたところにあるといえるだろう。

そして、「私」に感情移入しながら本文を読んできた読者は、ここで「私が感じている「驚き」や「寒気のようなもの」を共有することになる。ここまで読んできた読み手は、謎を突きつけられることになるわけだ。

さらに84～86行目を読むと、村松氏と「私」の体験はすべて一致しているにもかかわらず、一つだけ異なるところがあつたということがわかる。それは、「私」が娘たちにバス乗場までの路をたずねたのに対し、氏はそうしたことを行なかつたことだ。それは、村松氏が谿谷に行つたのが二十数年前のことであり、その頃にはまだ近くにバスが通つていなかつたためだつた。

このことがわかつて、「私」はますます不気味な感覚を強めたであろうと推測できる。なぜなら、村松氏と「私」が見た二人の娘は、年齢がほとんど同じだと思われるからである。二人の体験の間におよそ二十年の隔たりがあるはずなのに、二人とも同じ娘たちに出会つたかのようだつた。もしかしたら彼女たちは、時間を超えた超自然的な存在なのだろうか……。ここに至つ

てこの物語は、怪談めいた雰囲気をますます強めていくのである。

③ 「石田君」の登場と、物語の突然の幕切れ（88～93行目）

ところが、読者に向かつてさまざまな謎を突きつけておきながら、物語はあっけなく終わってしまう。「私」は、これまでの話のすべてを石田君という青年に聞かせる。すると石田君は興味を示し、自分もさつそく増富の谿谷に行つてみると言い出す。しかし、その後どうなつたのかといったことは、本文にはいつさい記されていない。リード文（前書き）に書かれているとおり、この短編小説はこれで「全文」なのである。

この小説の読者は、作者井伏鱒一によって、怪談めいた物語世界のなかに引き入れられ、謎を提示される。ところが作者は、そうした謎についていつさい説明することなく、物語を唐突に終わらせてしまうのだ。では、そこに作者のどんな意図があるのでだろうか？ この問題については、【設問解説】の問5で詳しく説明することにしたい。

【設問解説】

問1 大学入試センター試験の小説問題では、例年、問1でこうした形式の問題が出題されている。そしてこの問1は、基本的には語義を答える知識問題になっている。設問には傍線部の語句の「本文中における意味」を答えよとあるのだが、実際にはその語句の辞書的な意味が問われていることがほとんどなのである。したがつてここでも、傍線部の語句の前後の文脈ばかりにとらわれすぎず、その語句の本来の意味を意識しつつ、正解を選ぶようにしてほしい。

(ア) 「思わしい」は、「望ましい」とか「好ましい」とかいつた意味。それに打ち消しの言葉が付いているのだから、傍線部は「望ましくない」といった意味になる。したがつて、正解は②である。「私」は釣りをしたが、その成果は、自分にとつて望ましいものではなく、納得できるものではなかつたということである。①がやや紛らわしいが、単に「予想外」というだけでは、結果が予想外に良かつたのか悪かつたのか、わか

らない。また、③も、成果が望ましくなかつたからといって「最悪」とまでは断定できない。したがつて、①や④は不適切である。

(イ) 「鈴なり」とはもともと、果実などが、神樂鈴のようによく群がつて房をなしているようすを指した言葉である。神樂鈴とは、神樂を舞うときに用いる鈴で、一本の柄に十数個の鈴が付けられている。そんなふうに物が房のようになつて群がつているさまを、「鈴なり」というのである。したがつて、正解は④になる。

(ウ) 「詮索」^{せんさく}は現代文で頻出する語で、〈細かいところまで探り、調べ求めること〉という意味。正解は①である。「詮」は「詮議」などの「詮」、「索」は「検索」「索引」などの「索」だと考えれば、正解は推測できるだろう。

問2 まずは傍線部直前の一文に注目しよう。「私たちは人家が行手に見えるので元気づいていた」。これは裏を返せば、人家が見えるようになるまでは元気がなかつたということである。では、なぜ元気がなかつたのか。それはもちろん、胡桃の木の一件があつたからである。「私」たちは、目を瞠るほど大きな胡桃の木があつたにもかかわらず、往路ではそのことに気づかなかつた。「私」と垢石老は、そのことについて、不思議なことだと話し合っている(7~19行目)。そして、どこか気味の悪いような思いを抱きながら歩いて行くと、景色が開け、人家が見えてきた(21~23行目)。そこで「私」たちはにわかに「元氣」になり、傍線部のように「語り合」うことになつたのである。

以上の内容に最も即した選択肢は⑥であり、これが正解である。「日常を取り戻したような気分になり」が本文に書かれていないと思つた人もいるかもしれないが、胡桃の木の一件で気味悪いような思いをしたのは、「私」たちにとって、非日常的な体験だといえるであろう。そうした非日常的な気分から脱して元気になつたというのだから、そのことを「日常を取り戻したような気分になり」と説明しても、間違いではないはずだ。ま

た、「景気をつけるようなことを言い合つて」の説明。元気を失つていた「私」たちは、この場面で、元気を取り戻そと、ことさらに楽しげなことを言い合つてゐるのである。

他の選択肢については以下のとおり。

① 「自分たちの愚かさを思い知らされて」が正確ではない。「私」たちは、胡桃の木の一件について、それが不思議な出来事だとは言い合つているものの、自分たちが「愚か」であるといったことは言つていない。

② 「やや苛立つていた」が、本文から読み取れない内容である。

③ 「自分たちが何かに取り憑かれているような気がして」が正しくない。

この場面で、「私」たちは、往路では胡桃の木の存在に気づかなかつたことにどこか気味の悪さを覚えていることは確かだが、だからといって「何かに取り憑かれているような気がして」というわけではない。また「おののいていた」というのも、やや行きすぎた表現である。

④ 「自分たちの身にこれからよくないことが起つたりそつたと予感していた」が本文から読み取れない内容。たしかに胡桃の木の一件は、「私」たちにとつて不気味な体験だったが、この先もよくないことが起きるのではないかと「私」たちが「予感」していたわけではない。

問3 傍線部BからCに至るまでの「私」と「垢石老(=翁)」との会話について、それぞれがどういう意味をもつてゐるのか、一つ一つ検討していくことにしよう。

a 39・40行目の「翁」の言葉について

ここで翁は、「すごいなあ」「鄙まれだ」「絵のようだ」といった言い方をしているが、これは、二人の娘がとにかく美しいということを、率直に表現したものである。また、「俺は、方々の田舎に釣に行くが、あんなきれいな鄙まれは見たことがない」という言い方をしているが、ここからは、翁が美しい娘たちに出会つたことを滅多にない幸運だとどちらにしよる。

b 43・44行目の「私」の言葉について

この「私」の発言の前半部分は、基本的にはaの翁の言葉と同じように、二人の娘の美しさを褒め称えたものだ。解釈が難しいのは、それに続く「もしもし翁や、翁は、いま若返りたいと痛感してるだろう」という言葉である。

「翁」という字は「おう」とも「おきな」とも読み、男性の老人のことを指す言葉である。また本文冒頭にも「佐藤垢石老」とあるから、「垢石老（＝翁）」が歳をとった人間であることは間違いない。そして「私」は、そんな年寄りに向かって「あなたはいま（美しく若い娘たちを見て）自分も若返りたいと思ってるのではないですか」とたずねているのだ。しかも「私」は翁に向かって、「もしもし」とふざけたような言葉で語りかけている。これは、「私」が翁に對して、「いい歳をして若い娘に心惹かれているようですね」と、幾分からかうように言つてゐることなのだろうと判断できる。

c 45・46行目の「翁」の言葉について

「私」からからかわれてしまつた翁だが、まずは「いや、まアるで妙なものだ」と答えてゐる。これは明らかに、まともな返事になつていない。つまり、ここで翁は、「私」のからかいに對してはまともに答えず、それをはぐらかしているのである。

そして今度は、翁のほうから「私」に向かって、「お前さんは、バスの乗場を知つていながら路をたずねた。これは旅の心得として、先ず、どういったらしいものだろうな」と言つてくる。「私」がバス乗場の場所を知つていながらわざわざそれをたずねたのは、おそらく美しい娘たちと話したかったからだろう。つまりそこには、「私」の〈下心〉のようなものが見え透いていたわけだ。そのことを翁は、「旅の心得としていかがなものか?」という遠回しな言い方で、指摘してきたのである。つまり、ここで翁は、bで自分がからかわれたことの仕返しとばかりに、「私」に対して皮肉のような言葉を投げかけているのである。

d 47行目の「私」の言葉について

bとcで「私」と翁は、互いに相手のことをからかい、皮肉のようなことを言い合つた。もちろんこれは、二人が本気で仲違いしたといったことではない。ここまで二人の会話は、気心の知れた大人同士のふざけ合いといったものだと考えられる。

そして47行目で「私」は、「でも、幾山河を越えて行つても見よだ」と言う。これは、「あんなに美しい娘たちのことは、幾つもの山や川を越えてでも見に行くべきだ」という意味である。しかも「私」は、翁に向かって、「実際そういう感慨ではないだろかね」と念を押している。つまり、ここで「私」は、「娘たちの美しさはどんなことをしても見るべきだと思います、翁もそう思うでしょ?」という趣旨のことを言つてゐるのである。

e 48行目の「翁」の言葉について

右のように言われた翁は、「そんなもんだろうな」と答えてゐる。ここで翁は、dにおける「私」の言葉に賛同してゐるのだ。つまり、一人の意見は、最終的には一致を見ているのである。

以上のa～eをあらためて簡潔にまとめるときのようになる。

a 翁は、娘たちの美しさを讃え、こんな娘たちとの出会いは滅多にないということを率直に語つた。

b 「私」は翁に對して、いい歳をして若い娘に心惹かれているのではないかと、からかうように言つた。

c すると翁もそれに応じて、バス乗場の場所を知つていながらわざわざそれをたずねるというのはいかがなものか、というふうに、「私」に對して皮肉のような言葉を投げかけてきた。

d・e しかし最終的には、あんなに美しい娘たちにはどんなことをしても会いに行くべきだと「私」が言い、翁もその意見に賛同して、二人の意見は一致を見た。

以上の内容に最も即している①が正解。選択肢の言葉づかいがやや難しいが、「僕伴」は〈滅多にない幸運〉、「揶揄」は〈からかう〉という意味である。二つとも、入試の現代文では頻出する単語なので、知らなかつた人はこれを機にしつかり覚えておこう。

他の選択肢については、以下のとおりである。

② cについての説明で、翁が「私」を「教え諭した」となつてゐる点が間違い。「教え諭す」とは、〈物事の道理などを、よくわかるように言い聞かせて教える〉といった意味である。cでの翁の言葉は、遠回しな皮肉のようなものであつて、けつして「教え諭す」といつたものではない。また、d・eが「それぞれ自分なりに思いを馳せる」となつてゐる点もおかしい。「人はそれぞれ勝手に物思いに耽つてゐるのではなく、意見が一致したということを確かめ合つてゐるのである。

③ まず、b・cの「私」と翁の皮肉めいたやりとりの説明がない。また、d・eについての説明も間違つてゐる。「私」は、「気分を害して」もいないし、「ふてくされたような態度」もとつてはいない。また翁も「困惑」しているわけではない。最終的に「私」と翁は、意見が一致したことを見かめ合おうとしているのである。

④ c以降についての説明が間違つてゐる。cで翁は、「自分がいかに娘たちに魅力を感じてゐるかということを真摯に（＝まじめに、ひたむきに）説明しよう」とはしていらない。また、「私」が翁をからかうのはbにおいてだけなのだから、「私」が「さらに翁をからかい続け」というのもおかしい。さらに、「翁はやや気分を害してしまつた」というのも、eに矛盾する内容である。

⑤ まず、bで「私」が「翁に調子を合わせることに、やや恥ずかしさを感じていた」というのが、本文から読み取れない。また、cで翁が「旅先ではもっと素直になるべきだという心得を説いた」というのも正しくない。「私」がバス乗場への路を知つてゐるにもかかわらずそれを聞いたのは、美しい娘と話がしたいという自分の欲望に忠実になつたためだ

と考えられる。したがつて、「もっと素直に」なるというのは、もつと娘たちと話をしようとすることだというふうになつてしまい、これはcの翁の言葉と矛盾してしまうのである。

問4 傍線部は、②の部分、つまり「私」が村松氏の話を聞く場面の最後のところにある。そこでここでは、②の部分（50～87行目）の内容や、そこでの「私」の心情の推移について、確認をしてみよう。

まず確かめておきたいのは、村松氏が嘘をついているとは考えられないということである（→a）。【本文解説】②の中程でも説明しておいた通り、会話は村松氏が先導するかたちで進んでいるのだから、氏が「私」の言葉に調子を合わせて嘘をついているというふうに考へることはできないわけである。

次に読み取つてほしいのは、②の場面で、「私」が気味悪さをだんだんと募らせてきているということである。70行目に「私の驚きは重複した」とあるのに注目したい。これは、この時点で「私」が一度驚いたということを意味している。一度目の驚きは、村松氏も「私」と同様、大きな胡桃の木に往路では気づかなかつたが復路で気づくという不思議な体験をしたと知つたことの驚き。二度目の驚きは、村松氏も私と同様、美しい二人の娘と出会つていていたと知つたことの驚きである。つまり70行目の時点で、「私」の驚きはそれ以前の驚きよりも大きくなつてきてているのだ。

その後79行目で、「私」は「何か寒氣のようなもの」を覚える。これは、村松氏の見た二人の娘と「私」の見たそれとが、背恰好から何まで同じだつたということによるものである。さらにその後の85行目で、「私」は、村松氏の言葉を聞いて、より強い「驚き」と「寒氣」とを感じたはずだ。なぜなら、【本文解説】②の最後でも説明したとおり、ここで「私」は、村松氏と自分とが二十数年という歳月を隔ててほとんど同じ体験をしたということをあらためて意識し（→b）、ことの不気味さ、神秘性をより強く感じことになつた（→c）と思われるからである。

以上の内容に最も即している④が正解。「村松氏も自分もほとんど同じ体験をしたことは間違いない」がa、「両者の体験の間に長い時間的隔たりがあるということを考えて」がb、「いつその気味悪さを実感してしまった」がcに、それぞれ対応している。「自分がその体験をしたときのことを思い浮かべている」は、傍線部そのものについての説明である。他の選択肢については、以下のとおり。

① 「私」の感じた「驚き」や「寒気のようなもの」についていつさい触れられていないという点で、正解にはならない。また「貴重な体験を、あらためて自分一人のものとして心のなかで大切にしていこうとしている」というのも、本文から読み取れない内容である。

② 「村松氏」が「嘘をついていることは間違いない」というのが、aと大きく矛盾する。

③ 選択肢前半の内容はとくに間違っていないため、やや紛らわしくなっているが、「美しい風景を思い浮かべることで、なんとか冷静さを取り戻そうとしている」というのが、本文から確定できない内容である。たしかに傍線部で「私」は「美しい風景を思い浮かべ」ているのだが、それが「冷静さを取り戻すためなのかどうかは、本文に述べられていないのである。

⑤ 「妙に納得してしまうような気持ちになり」が誤り。「納得」しているわけではなく、むしろ不可解な気持ちや不気味な感覚などをますます強めているはずである。

問5 この小説は「石田君」についての短い逸話で終わっているが、そのことが本文全体にもたらしている効果を答えるという問題である。まず、石田君の人物像を確認しておこう。間違なくいえるのは、彼が好奇心の強い人物だということである(→a)。怪談めいた話を聞きながらも、怖じ気つくことなく「では、さっそく行つて見ます」と答えるといふのは、旺盛な好奇心の表れだと考えてよいだろう。

さらに石田君は、「私」や村松氏の話を「怪談」ではないと捉えようとしている。もちろん、石田君のなかに恐怖心のようなものがまったくないということはないはずだ。彼が「僕、怪談は嫌いです」とえて言つてるのは、怪談だつたら嫌だという気持ちが少しはあるからにちがいない。しかし基本的には、彼は「怪談」を否定している。そのことは、彼の「こ

の話は怪談ではなくて偶然の話ですからね。僕、その偶然を求めに行くんですから」という言葉からも明らかである。つまり、石田君は、「私」の語つた出来事について、それを神秘的・怪異的なものとしてではなく、現実的・物質的なものとして捉えようとしているのだ(→b)。

では、右のa・bのような人物である石田君を登場させることで、小説全体にはどんな効果がもたらされているだろうか。まず「言えることは、物語全体を怪談風の話とだけ捉えることができる」などと捉えようとしている(→c)。仮にこの物語が傍線部Dで終わつており、その後に不気味さを強調するような文が付いているだけだったとしたら、本文全体は間違いくる怪談風の神秘的な物語だということになつてしまふ。しかし、そこに「怪談」を否定する人物である石田君が登場することで、物語を「怪談ではなくて偶然の話」と捉える視点が導入されているのである。

以上のことから考えると、石田君の登場には、本文全体の読みや解釈の幅を広げるという効果があると考えることができる(→d)。【本文解説】
③でも説明したとおり、作者井伏鱒二は、読者の前にさまざま謎を提示するのだが、そうした謎についていつさい説明しないまま、物語をあつけなく終わらせてしまう。それは、読者に向かつて(この物語を自由に解釈していいですよ)と言つているかのよう、作者の姿勢を示しているといふことになるのだろう。

以上の内容をあらためて整理すると、次のようになる。

- a 石田君は、好奇心の強い人物である。

- b 石田君は、物事を神秘的にではなく現実的に見ようとするところが

ある。

←

- c そうした石田君の登場によつて、物語全体を単に怪談としてだけ捉えることができなくなる。

- d 物語の解釈に広がりが生じる。

これらの内容に最も即している③が正解である。「即物的」とは〈物事を現実の実体に即して物質的に捉えようとするさま〉といった意味で、b の内容に対応している。「怪異譚」の「譚」は〈話・物語〉という意味で、たとえば「冒険譚」とか「奇譚」とかいつた使われ方をする。入試現代文で頻出の用語なので、しっかりと覚えておきたい。

他の選択肢については、以下のとおりである。

- ① 選択肢の前半と後半の内容が結びつかず、まったく見当はずれの説明である。最後に「私」の話を「怪談ではなくて偶然の話」と捉えようとする石田君が登場するからといって、読者がいきなり「物語全体が『私』の妄想にすぎない」と思うはずがない。「私」とともに氣味の悪さを感じながら物語を読み進めてきた読者は、現実的な石田君の登場によって、物語全体を怪談風の話とだけ捉えることができなくなる。つまり、読者は、偶然なのか怪談なのかわからず、謎が謎のまま残るといった読後感を味わう、というのが妥当な理解であろう。したがって、石田君の逸話に、「物語全体が『私』の妄想にすぎない」ということを「伝える」効果があるとはいえない。

- ② 「幻想に取り憑かれている者たちの愚かさを浮かび上がらせる」が間違い。「私」たちが「幻想に取り憑かれている」のかどうかも本文からは確定できないし、「私」たちが「愚か」かどうかといったことも、本文には書かれていないのである。

- ④ 石田君が「『私』たちが神秘的な体験を味わったことの原因を知つている」というのが、大きな間違い。また、「読者を、これから始まる謎

解きに参加させる」は言いすぎである。リード文（前書き）に、この本文は小説の「全文」だと書かれているのだから、この小説には続きなどないわけで、これから「謎解き」が「始まる」はずはない。

- ⑤ 選択肢前半の内容はとくに間違つてはいないため、やや紛らわしくなっているが、「人間とは未知のものに惹かれる存在であるという主題をさりげなく示す」というのが誤りである。たしかに石田君は未知のものへの好奇心が旺盛な人物だが、それを「人間とは……である」というかたちで普遍化・一般化することはできないし、ましてや「人間とは未知のものに惹かれる存在である」ということが本文全体の「主題」だとはいえないはずである。

問6 ここ数年間、大学入試センター試験の小説問題の問6では、このよう

に本文中にある特徴的な表現の効果を問う問題が出題されている。問われていることが瑣末な事柄であることが多いので、たとえ面倒だと感じても、選択肢に書かれていることと本文の特定の箇所とを丁寧に照合し、慎重に解答を選ぶことが肝要である。

- ① まず、「本文中の地の文（＝台詞以外の部分）のなかには比喩的な表現などはいっさい用いられていない」が、あまり正確な説明ではない。たとえば30行目の「何か、尊いものが消え失せて行つてゐるかのように思われた」などは、広い意味での「比喩的な表現」だといえるだろう。さらに大きな間違いは、61行目の「山と山が手を合わせたように迫つてゐる」という表現を、「登場人物の個性」を「より強く浮かび上がる」せるものだとしている点である。この「山と山が……」という表現は、自然の情景を描写したものなのだから、この表現によつて「登場人物の個性」が示されているというのは、説得力のない説明であろう。

- ② 「『私』の体験が夢にすぎなかつた」というのが、本文から読み取れないのである。

- ③ たしかに垢石老の言葉のなかには「まあるで」と「カタカナが用いら

れて」いるが、それが「現代的な雰囲気を感じさせる」と断定することはできない。さらに大きな間違いは、「二人の性格の対照がより明確にされている」という部分。「私」と垢石老の「性格」については、本文中にはいつさい言及がないはずである。

④

26・27行目には、「紺がすりの着物をきて手拭をかぶり、目籠を背負っていた」というふうに、「二人の娘の恰好が細かく描写されている。また74・75行目でも、同じように「一人の娘の恰好が細かく描かれている。さらに80～82行目では、たしかに娘たちの背負っていた籠の中身のことが、やはり詳細に説明されている。したがって、この選択肢の前半の内容は正しい。そして、このような「細部の描写」があることで、物語全体に「リアリティ（＝現実らしさ・真実味）」が増しているというのも、正しい説明である。物語自体は「奇妙な雰囲気」をもつた怪談風のものだが、そこに細かい描写が加わることで、物語全体が単なる絵空事ではなく、リアルなものになるというわけである。したがって、この④は正解である。

⑤ たしかに50行目と88行目の「――」のところで場面は「時間的に転換している」が、だからといって、この文章を「過去と現在の場面が錯綜（さくそう）して（＝複雑に入り組んで）」いると説明するのは、やや無理がある。しかも、謎は謎のまま残るのだから、「話が進むにつれて過去にさかのぼり、謎が明らかにされていく」というのは、明らかに間違いである。

⑥ まず59行目を見ると、「私」が「いや、僕も見ました。そりや、ともも鄙まれで……」と言いかけたとき、すぐに村松氏が「まあ聞きたまえ」と言つて、自分の体験談を話しあじめている。これはもちろん、「話をしている『私』の言葉が『村松さん』によつて遮られてしまったことを示している。また71行目でも、「私」が「鄙まれの……」と言いかけると、村松氏がそれを手で遮つて「いや、それが君……」というふうに自分の話をしている。そして村松氏の「まあ聞きたまえ」という言葉などからは、氏が自分の話をしたくてうずうずしており、思わず

「私」の話を遮つていることがうかがえる。したがって、この⑥は正解である。

第3問 古文

【出典】

『狭衣物語』

『狭衣物語』

成立

平安時代後期

ジャンル

作り物語

作者

六条斎院宣旨（源頼国女）

との説があるが、定かではない。

内容

全四巻。高貴な家柄の出身で、容貌・才芸に優れた狭衣大将は、従妹の源氏宮との叶わぬ恋に苦悩し、出家の望みを持ちつつ、一方で多くの女性たちと恋をする。文章のいたる所に、『源氏物語』の影響が見られる。

なお、今回の本文は、新潮日本古典集成『狭衣物語 上』（鈴木一雄校注）に拠るが、出題にあたって一部表記を改めている。

【本文解説】

今回の本文は、卷二の中盤の一節である。本文までの概略は、以下のとおりである。

主人公の狭衣（今回の本文では「大将」）は、堀川関白（本文では「殿」）の子であった。源氏宮は、先帝の皇女として生まれたものの、両親を相次いで亡くしたため、亡き父帝の妹（今回の本文では「母宮」）とその夫である堀川関白に引き取られ、狭衣と兄妹同様に育てられた。美貌の源氏宮に人知れず恋心を抱く狭衣だったが、兄妹同様の関係であることから、両親の気持ちを慮り、その思いを言い出せずにいた。そんな折、源氏宮が東宮妃に望まれていることを知り、思い余った狭衣は、源氏宮に思いを告げる。しかし拒まれて、それ以降源氏宮に避けられるようになつた狭衣は、叶わぬ恋に苦悩することになる。

その後、帝が譲位し、東宮が新帝となつたが、新帝の父である一条院が亡くなつた影響で、一切の儀式が中止または延期となり、就任したばかりの賀茂神社の斎院も交替することとなる。そのため、新帝への入内が予定されて

いた源氏宮の環境にも変化が訪れる。

【第一段落】源氏宮の入内の準備と、斎院入りの噂。

一条院の死に伴い、新たに斎院になるべき皇女の不在が取り沙汰される。ここで、亡き先帝の娘である源氏宮が斎院になるのではないかという噂が流れれるが、長年、源氏宮を自分の娘として育ててきた殿は取りあわない。仕える人々も、源氏宮の入内を心待ちにしていた。

【第二段落】次々にあらわれる予兆と、神からの夢のお告げ。

殿の周辺では多くの兆しが現れ、最後には、殿の夢に賀茂神社からの使者が現れ、源氏宮の入内を中止し、斎院として神に仕えさせるようにとの神意が示される。殿からこの話を聞いた狭衣は、かえつてほっとするのであった。

【第三段落】源氏宮の斎院入りに対する、狭衣大将の複雑な心中。

狭衣は一人思い悩む。両親の思いなどを考えると、強引に源氏宮をわがものにすることには踏み切れない。源氏宮が入内せずに斎院になれば、帝への嫉妬からは解放されるかもしれないが、源氏宮にはいつそう手が届かなくなることを思うと、さらなる苦しみにとらわれる。

【第四段落】帝への夢のお告げと、源氏宮の処遇の決定。

帝も源氏宮を斎院にするべきことを示す夢を見る。それを殿に相談し、占うと、朝廷にとつても殿にとつても吉兆であるとの結果が出たため、源氏宮が斎院になることが決定した。

【全文解釈】

斎院の御後任には、一条院の后宮の姫宮がお就きになつたが、大膳職にお移りになつていたのに、（父一条院の服喪のために）戻りなさつて、斎宮（に就いていた姫宮）も退任なさつた後任に、就きなさるのにふさわしい女宮たちが、今はいらつしやらなかつた。「源氏宮の入内はどのようになるはずのことだろうか（＝源氏宮が入内を取りやめて斎院になるのだろうか）」と、世間の人々がだんだんと言い出すのを、殿におかれてもお聞きになつ

て、「ああつまらないことよ。まだ幼少のときから皇族ではない（立場の）人におなりになつてしまつたのだから、今さら神も朝廷も（源氏宮のこと）を）気にもかけていらつしやらない。お仕えする女房たちも宮中あたりの現代風なはなやかさを、早く見てみたいと心待ちにしているにちがいない。

源氏宮のご容貌は、この頃はますます盛りで欠けるところなく美しくおなりになつて、本当に、光るとはこの方の様子を言うべきであろうかとお見えになるのを、「帝と申し上げる（方であつた）としても、『このような（美しい）人（＝源氏宮）が世の中にはいらつしやつたのだなあ』と、そうは言つてもきつと御目をみはつて驚きなさるだらうよ」と、見申し上げるすべての人はお互に語り合つては（源氏宮の入内を）待ち遠しく思うが、源氏宮の御夢に、（何かの兆しが）不思議でよくわからずなんとなくおそろしい様子になつて、（源氏宮は）「どのようになつてしまふはずなのだろうか」と、人知れず心細くお思いになるが、「このように（＝不思議な夢を見ました）」などとも、母宮にも申し上げなさらないでお過ごしになるうちに、殿の邸内にはなはだしの神仏のお告げ（を示すできごと）があるのを、（殿が）占わせなさると、源氏宮が御厄年に当たつていらつしゃつて、厳重に慎みなさらなければならぬ旨を、（占つた者が）多く申し上げたので、（殿は）たいそう恐ろしいことと驚きなさつて、様々なご祈祷などを、格別に始めるなどさせなさるうちに、殿の御夢にも、「賀茂神社から」と言つて、禰宜と見受けられる人が参上して、榊（の枝）に挿してある手紙を源氏宮の御もとへ差し上げるのを、（殿が）自分で開けてご覽になると、

「はるか神代の昔から注連縄を引き始め（＝神域で大切に守つてき）

た榊葉（＝源氏宮）を、私より他に誰が折ることができるか、いや、できない（＝私以外の誰も手に入れることはできない）。

まあよいやつてみなさい。そのようにすれば、きっとたいそう不都合（なことが起こる）だらう」と、はつきりと書かれているとご覽になつて、目覚め

なさつた気持ちは、たいそう恐ろしくお思いになつて、母宮・大将などに語り申し上げなさるのを、聞きなさる（大将の）気持ちは、かえつてほつとして嬉しくなりなさつた。

（大将は）長年の間も、「あれやこれやと（源氏宮のこと）で、わが身ばかりを思い惱ませながら、それはいつてもやはり（源氏宮を）自分のものとして人目を避けてお隠し申し上げて、（二人で）ただただ深い山里などにさすらうようなことも、生きている甲斐がないだらう。だからといって、親たちが思ひもよりなさらない状態で、ほのかに（源氏宮のお姿）拝見し始めて（＝からうじて契りを結び申し上げ始めて）も、かえつてひどい心の乱れは、いつそう募るのだらう。『それならば、それでもよい（＝二人が契りを結んだならばかまわない）』とは、（親たちが）必ずしも心の中でお許しにならないということはけつしてあるまい。（だが）そうだとしても、（親たちの）お心の中では、『（二人の関係は）思いがけないことだなあ』と、何事につけても、明けても暮れても思い乱れなさるようなことが、たいそう気の毒でつらいことだよ』などと、おのずと想い嘆きなさつていたのだが、本当に（源氏宮は）神代（の昔）から（斎院として神に仕えるような）血筋が格別であったご宿命だったので、（斎院となるのであれば）今はかえつて気が楽で、「これからは」明けても暮れても（源氏宮が入内したことによる）ねたましく不快な気持ち（になること）はないだらう」と、心が晴れる気持ちがしなさる一方で、「（源氏宮への思いを今後）どのように決めて、どのように嘆くのだらうか。生きていれば逢えるという目処^{めど}さえ立たず、多くの年月自分があれこれと思い乱れていた（源氏宮との）ことは、はるか手が届かないことに（なるのだろう）」と思うのは、また普通と違つてたいそう苦しい（大将の）心の内である。

帝の御夢などにも、はつきりとご覽になることがあつて、驚きなさるので、殿にご相談申し上げなさつて、（お二人の）ご心中はたいそう残念だが、御夢占いなどなさると、（源氏宮を斎院にすれば）朝廷をはじめとし申し上げ、殿の御ためにも、前途は末永くすばらしいはずだというようばかり占

い申し上げたので、あれこれと誰も（自分たちの意志で）お決めになれることがではなくて（源氏宮が斎院に）定まりなさつたのを、世間では予想外で驚いたことだと言つた。

【設問解説】

問1 短語句の解釈問題

センター試験の古文の問1では、例年、短語句の解釈が三題出題される。古語の意味や文法の知識が決め手になつて解答できる問題もあるが、本文の内容を踏まえて判断しなくてはならない時もあるので、重要古語を覚えるのはもちろん、必ず文脈も考えながら最も適した解釈を選ぶ学習を中心がけてほしい。

(ア) あなあぢきなや

ポイントとなる重要古語は、「あな」「あぢきな」で、「あぢきな」はク活用形容詞「あぢきなし」の語幹である。

あな（感動詞）

ああ。あら。まあ。

※ 「あな」+形容詞・形容動詞の語幹（+終助詞「や」）で、感動表現となる。

あぢきなし（ク活用形容詞）

つまらない。おもしろくない。無意味だ。

「あな」の前記の意味が反映されている選択肢は、④・⑤である。そして「あぢきなし」の訳は④の「つまらない」のみが該当するので、正解は④だとわかる。「や」は終助詞で詠嘆を表す。

文脈を確認すると、この傍線部は、源氏宮が入内せずに斎院になるべきだという世の人の声に対する殿の感想にある部分である。傍線部の後に示される、この声に取りあわない殿の態度からも④が正しいことがわかる。

る。

(イ) いつしかと心もとながり思ふべし
ポイントとなる重要古語は、「いつしか」「心もとながり」である。

いつしか（副詞）

1 いつになつたら。

2 いつの間にか。知らぬ間に。早くも。

3 早く。

※ 3は、意志・願望・希望の表現と呼応する。

心もとながる（ラ行四段活用動詞）

1 待ち遠しく思う。じれつたく思う。

2 不安に思う。

※ ク活用形容詞「心もとなし」の語幹に接尾語「がる」がついたもの。

選択肢を見ると、「いつしか」の語義では正解を絞りにくい。「心もとながる」については、④の「慌ててている」のみが語義に合わない。②「心待ちにして」は前記1の意味にあたり、⑥「苛立ち」も1「じれつたく思う」の表現の延長と考えられるため、どちらも間違いとは言えない。よつて、④以外のいずれが正しいかは、文脈によって判断する必要がある。

文脈を確認すると、ここは、「さぶらふ人々（=お仕えする女房たち）」が、「内裏わたり（=宮中）」の「今めかしさ（=現代風なはなやかさ）」を「いつしかと心もとながる」だろうという部分なので、①の「いつどうなつてしまふのかと心配している」や③の「いつまで続くことかと不安に感じている」はあてはまらず、⑤の「早くしてほしいと苛立ちを感じている」では「現代風なはなやかさを早くしてほしい」となり、文意が通じない。②の「早く見てみたいと心待ちにしている」の意味で考えるのが文脈に合っている。したがつて、正解は②である。

(イ) なかなか心やすく

ポイントとなる重要な古語は、「なかなか」と「心やすく」である。

なかなか(副詞)

1 かえつて。むしろ。

2 なまじつか。中途半端に。

心やすし(ク活用形容詞)

1 安心である。気楽だ。

2 親しい。

3 たやすい。容易である。簡単だ。

「なかなか」の意に該当するのは、②「むしろ」と、⑤「かえつて」の二つである。また、「心やすし」については、①「心のどかで」、③「気が休まり」、⑨「ほっとして」の三つが、いずれも前記1の「安心である。気楽だ」の意味にあてはまる。二つの語を両方とも正しく解釈している⑤が正解である。

文脈を確認すると、傍線部は、殿から、源氏宮が斎院になるようにとう夢のお告げがあったことを聞いた際の、母宮が大将の心情部分である。直前に、「もの恐ろしく思されて」とあるように、殿はその夢を恐ろしく感じたのだが、その話を聞いて「かえつてほっとして」嬉しくなったというのである。源氏宮が斎院になるということは、源氏宮の入内が中止になるということだから、それを嬉しく思うのは、母宮ではなく、源氏宮に思いを寄せる大将である。以上の展開が不自然でないことから、⑤が文脈に合うことが確かめられる。

問2 文法問題

センター試験の古文の問2では、例年、文法の問題が出題される。今回は、敬語について出題した。敬語の種類と、誰から誰への敬意かが問われているので、まず、それぞれの敬語の種類（尊敬・謙譲・丁寧）に注目し

て確実に選択肢を絞り、その上で、敬意の方向を確認して正解を導くとい。

まず、敬意の方向の考え方を確認し、その後、各波線部を見ていく。

敬意の方向

1 「誰から」の敬意を表しているか。

地の文……作者から。

2 「誰へ」の敬意を表しているか。

① 尊敬語……動作の主体へ。

※ 「誰が」その動作をしたかを考える。

② 謙譲語……動作の受け手へ。

※ 「誰に」その動作が及んでいるか、「誰を」相手にした動作かを考える。

③ 丁寧語……聞き手へ。

※ 地の文なら読者、会話文ならその聞き手、手紙文などならその読み手となる。

a 「居させ給ふべき女宮たち」

波線部の「給ふ」は、次のように尊敬語と謙譲語の二種類があるので、注意しなければならない。

給ふ(ハ行四段活用動詞／ハ行下一段活用動詞)

1 お与えになる。くださる。……尊敬の本動詞

2 お～になる。～なさる。……尊敬の補助動詞

※ 1・2は、四段活用。

3 ～ます。～ております。……謙譲の補助動詞

※ 3は、下二段活用。

命令形は用いられず、終止形はまれである。

会話文か手紙文の中にしか用いられない。

ここでは「居／させ／給ふ／べき」と、助動詞「させ」に接続していることから補助動詞の用法である。波線部は、助動詞「べし」が下接しており終止形であることや、地の文にあることから、前記2の尊敬の補助動詞である。

次に、敬意の方向を確認する。文脈を考えると、賀茂の斎院と同様に未婚の皇女が就くことになっている伊勢の斎院についても、前任の斎院が「下りさせ給ひぬる（＝退任なさつた）」代わりに、その地位に「居させ給ふべき女宮たち」がいないということを語っている部分であり、斎院や斎宮の後任に就くことを意味する「居させ給ふ」という動作の主体は「女宮たち」である。よって、波線部 a は、

a 作者から女宮たちへの敬意を示す尊敬語

と整理できる。これを満たす選択肢は②・③・④である。

b 「聞き給ふ心地」

この「給ふ」も、動詞「聞き」に接続していることから補助動詞である。また、直後の名詞「心地」にかかるので連体形である。下二段活用ならば連体形は「給ふる」となるので、この「給ふ」は四段活用であるとかなり、また、地の文にあることからも、尊敬語であるとわかる。

b 「聞き給ふ心地」

次に、敬意の方向を確認する。ここは、殿が自分の見た夢の内容を「母宮・大将などに」語り、それを「聞き給ふ心地」という文脈なので、動作の主体は、母宮か大将である。しかも、既に問1(イ)の解説でも触れたように、源氏宮が斎院になり、入内が中止されることを思わせる夢の話を聞いて、「なかなか心やすくなれしく」感じるのは、人知れず源氏宮を慕つていた大将だと思われる所以、この部分の動作の主体は「大将」である。よって、波線部 b は、

b 作者から大将への敬意を示す尊敬語

と整理できる。これを満たす選択肢は②のみである。これにより、正解は

②であることがわかるが、念のため、c も確認しておこう。

c 「とり隠し聞こえて」

聞こゆ（ヤ行下二段活用動詞）

1 申し上げる。……謙譲の本動詞
2 ～申し上げる。……謙譲の補助動詞

3 聞こえる。
4 噂される。
5 理解される。

※ 3・5は、敬語ではない。

ここは、動詞「とり隠し」に接続していることから、2の謙譲の補助動詞の用法だとわかる。

次に、敬意の方向を確認する。まず波線部は思考部の中にあるので、「作者から」の敬意を表すという選択肢は消去できる。すると、残った②・③・⑤のいずれも「大将から」の敬意を表すとしていることから、ここが大将の思考部で波線部は大将からの敬意を表すこと、また、「聞こえ」が謙譲語であることから動作の受け手への敬意を表すことがわかる。そこで、「とり隠し聞こえて」という動作の受け手が誰なのかを考えよう。前書きに、大将が源氏宮に思いを寄せていたことや、源氏宮の入内の話を聞いて悲嘆にくっていたことが示されているので、思考部の冒頭「とやかくやと身一つを思ひくだけながら」とは、大将が源氏宮への恋に悩む様子だと理解される。そして「我がものにひき忍びとり隠し聞こえて（＝自分のものとして人目を忍んでお隠し申し上げて）」、山里深く一緒にさすらつてしまおうかと思いつめているのだから、大将は「[源氏宮]を」とり隠し聞こえて」と考えていると思われる。よって、謙譲語「聞こえ」の動作の受け手は「源氏宮」で、波線部 c は、

c 大将から源氏宮への敬意を示す謙譲語

と整理できる。これを満たす選択肢は②・⑥であり、②が正解であることが確かめられる。

問3 理由説明問題

傍線部X「いともの恐ろしく思されて」と殿が思った理由を説明する問題である。

まず、傍線部の直前に「殿の御夢にも、……と見給ひて、うちおどろき給へる心地」とあることから、殿は夢を見たために、恐ろしく思つたのだという内容が読み取れる。しかし、選択肢①・②に関しては、いずれも殿や源氏宮が賀茂神社の禰宜や神からのメッセージを受け取ったのを現実の出来事としているので、不適当である。

次に、その夢の内容に関しては、本文には、「賀茂神社から」と言つて、禰宜と見受けられる人が參上して、榊の枝に挿してある手紙を源氏宮の御もとへ差し上げる」という内容が書かれている。この内容に対して、選択肢③の「賀茂神社の神から源氏宮に宛てた手紙に……書かれている」と、選択肢⑤の「賀茂神社の神から……お告げを受けた」は矛盾しない。しかし、選択肢④の「賀茂神社の禰宜が……よこした手紙に……記されていいた」は、本文で、禰宜が手紙の差出人ではなく、単に手紙を届けに来た使者として登場していることと矛盾する。このことから、選択肢④は不適であるとわかる。

そこで、その夢で送られた手紙の内容を考えよう。手紙には、

神代より／標引きそめし／榊葉を／我よりほかに／誰か折るべき
という歌が書かれていた。「そむ」は「初む」と書き表わされ「し
始める」と訳せることを踏まえ、(注17)などを参考にすると、この歌は
次のように解釈できる。

はるか神代の昔から注連縄を引き始めた榊葉を、私より他に誰が折
ることができるか。

この夢は、次の斎院に誰がなるかが世間で話題になり、源氏宮の身の上

について様々な兆しが現れるという状況で、殿が見たものであることを考え合わせると、「はるか神代の昔から、注連縄を引き始めた榊葉」が源氏宮を指すこと、「私より他に誰が折ることができるか」は、「誰も折ることができない」という趣旨の反語表現であること、歌全体としては、賀茂神社の神が自分以外の何者にも源氏宮を渡すつもりがないことを示していることがわかる。選択肢④は、「榊葉」を文字通り「榊」と解釈しており、歌が比喩的に示している内容に触れていないところからも、不適切であることが確かめられる。

さらに、手紙の内容で、歌の後に書かれた「よしころみ給へ。さては、いと便なかりなむ」を解釈してみよう。「便なかり」は、ここでは「不都合だ。具合が悪い」の意の形容詞「便なし」の連用形、「なむ」は、連用形に接続しているので、完了（強意）の助動詞「ぬ」+推量の助動詞「む」で、「きっとだらう」と訳す。すると、この部分は、「まあよいやつてみなさい。そのようにすれば、きっとたいそう不都合だらう」と訳せる。つまり神は、源氏宮に宛てた手紙で、「もし入内して自分以外の人るものになつたら、きっと不都合なことが起こるだらう」と、脅しているのである。手紙の内容がこのような趣旨でまとめられている選択肢は③で、これが正解である。選択肢⑥は、「帝の怒りを買うにちがいない」と、恐ろしく思う内容が本文に合わないため、不適切である。

問4 心情説明問題

二箇所の傍線部が、いずれも大将の心情についての表現であることは、設問からわかる。各傍線部の前には、「」で括られた部分があるので、ここに具体的な大将の心情が述べられていくと考えられる。そこで、A・Bそれぞれの傍線部とその前に示された内容を確かめることから始めよう。

傍線部Aでは、「胸あく」が重要古語である。

胸あく（力行四段活用動詞）
心が晴れる。すつきりする。

よつて、この傍線部は、「心が晴れる気持ちがなさる一方で」という意味になる。選択肢を見ていくと、①の「心が軽くなつた」は前記の「胸あく」の意味に合うが、②「あきらめようとして」、③「自暴自棄に陥つて」、④「心を乱して」、⑤「何も考えられず茫然とした気持ちになつて」は「胸あく」の解釈としてすべて不適当である。以上から①が正解である可能性が高いと思われるが、傍線部の前に述べられている内容の検証もしてみよう。

【第三段落】は、源氏宮への叶うことのない恋心のために長年「思ひ嘆かれ」ている大将の心情が描かれているが、その後に、「神代より筋ことなりける御宿世なりければ」とあるのは、源氏宮を斎院にすることを促すような殿の夢の話を聞き、源氏宮について「神代の昔から血筋が格別であつたご宿命だったので」と、斎院になるべき宿命であつたと思っているというのである。斎院となれば、少なくとも入内の話は立ち消えとなる。傍線部Aの前の行の「今はなかなか心やすくて」は、【第二段落】最終行の「なかなか心やすくうれしくぞなり給ひぬる」と同じで、源氏宮が斎院になることをかえつて喜ぶ大将の心情を示している。その後には、「明け暮れ妬うやましき心のうちはあらじ」とあり、これが傍線部Aの心情の具體的な内容になるわけだが、そもそも、なぜ大将がこの時苦しんでいたのかというと、前書きにあるように「源氏宮が……帝の妃として入内するといふ話」を聞いていたからである。したがつて、ここで「妬うやましき心のうち」というのは、源氏宮が入内した時の大将の苦悩を指していることがわかる。大将は、源氏宮が斎院になれば、そのような苦悩は「あらじ（＝ないだろう）」と期待して、心が晴れる気持ちになつてるのである。

選択肢①は、この苦悩を「帝への嫉妬」と説明し、そこから逃れられると考えて「心が軽くなつた」としており、この傍線部までの本文の内容と合致する。しかし、他の選択肢はどれも、源氏宮の入内が中止になつた場合に今のが解放されるだろうという大将の期待を述べていないため、間違いであるとわかる。

傍線部Bについても確認しておこう。傍線部Bは、その直前の「いかに定めて……はるかなるにこそは」が、その心情の具体的な内容だから、この部分を解釈しよう。まず、ここは大将が源氏宮とのことをあれこれ考えている場面であるから、「いかに定めて、いかに嘆くにか（＝どのように決めて、どのように嘆くのだろうか）」も、二人の関係についてのことだとわかる。その次の「あらば逢ふ世」は、（注18）にあるように、古歌を踏まえた表現で、この歌は「なんとかしてしばらく忘れない。（恋死にせずに）命だけでもあるならば逢う時があるかもしれないから」といった意味である。よつて、「あらば逢ふ世の限りだなく」とは、「生きていれば逢えるという目処さえ立たず」ということである。「こちらの年ごろ」は「多くの年月」、「我が思ひくだけつる筋」の「筋」とは、「の方面のことを」の意で、ここでは源氏宮とのことを指す。「はるかなる」は隔たりを表す形容動詞で、ここでは「はるか手が届かない」といった意味である。この部分を通して訳すと、「生きていれば逢えるという目処さえ立たず、多くの年月自分があれこれと思い乱れていた源氏宮とのことは、はるか手が届かないことになるのだろう」となる。つまり、大将は、源氏宮が斎院になつてしまえば、入内が中止になり、嬉しい一方で、長年の自らの恋の成就も見込めなくなることを嘆いているのである。選択肢①は、この傍線部Bの心情をも十分に説明している。したがつて、正解は①であると考えられる。

念のため、不正解の選択肢について詳細をまとめておく。

②は、A「胸あく」を「あきらめようとしている」とする点が誤りで、Bの「帝が源氏宮を入れさせることを断念してくれたら、自分にも源氏宮と結婚する可能性があるのでないか」という「一縷の望み」が本文の内容と合わない。

③は、Aの全体、特に「源氏宮が斎院になろうが入内しようがどうでもよいと自暴自棄に陥つており」が「胸あく」の意味とも、源氏宮の入内の中止を期待する大将の心情とも合っていないし、Bの「源氏宮を思つて苦

しんだこれまでの日々を、むなしく感じている」と、大将の心情について過去を振り返るもののように説明する点が、今後の恋の成就への希望を失っていることを示す本文の記述と違っている。

④は、Aの「明けても暮れても帝を妬ましく思つて心を乱して」が、源氏宮の入内中止によってむしろ帝への嫉妬から解放される方向にある大将の心情とは逆のことを述べており、Bは「苦惱はいつまでも続く」と大将が考えているとする点が、本文に根拠を持たない。

⑤は、Aで源氏宮と自分が「とうてい釣り合わない」という記述に関して本文中に根拠がなく、「何も考えられず茫然とした気持ち」が「胸あく」の意と合わない。Bの来世での恋の成就を願つて「仏道修行に励むべきだ」という記述も本文の内容とまったく異なる。

問5 内容説明問題

傍線部の「定まり給ひぬる」は、「決まりなさった」と訳せる。何がどのように決まったのかを確かめるために、傍線部が含まれる【第四段落】の内容を整理してみると、

- I 帝が夢を見て、その内容に驚く。
- II 帝は、殿に相談して、占いをさせる。

- III 占った結果、朝廷・殿の両方にとって将来が末永くすばらしいはずなどの吉兆が出る。

- IV これ以上評議のしようもなく、「定まり給ひぬる」という決着に至となる。

本文の【第二段落】でも、源氏宮の入内の話が進む中での、源氏宮や殿の「夢」の話が述べられている。源氏宮の夢の内容は示されていないが、殿の夢は、問3の解説でも述べたように、源氏宮を斎院にせよという神の意向を示すものであった。また、【第四段落】1行目の「御心のうちども」は、夢を見た帝と、相談を受けた殿との「御心のうちども」であると考え

られ、源氏宮の入内を進めようとしていた帝と殿の二人がともに「いと口惜しけれ（＝たいそう残念だ）」という気持ちであったというのがある。ここから、前記Iの帝の夢の内容は、【第二段落】の殿の夢と同様、源氏宮を斎院にせよというものだったと考えられる。すると、最終的に決まったことは、源氏宮が斎院になることだと考えるのがふさわしい。すなわち、【第四段落】は、帝も殿も、源氏宮を入れさせたかったが、帝の夢を占つたところ、源氏宮を斎院にすることが、帝にとつても殿にとつても将来永くすばらしいことだという結果だつたので、誰もそれに異議を唱えることもできず、源氏宮が斎院になるということが決まった、といいうきさつを記しているのである。以上の内容を説明した選択肢は⑥で、これが正解である。

以下に、その他の選択肢の不適切な点を確認しておく。

①は、帝が「殿からも同じ夢を見たと言われた」という部分は、本文に根拠がない。また、「帝と殿には必ず凶事が起ころる」という占いの結果が、IIIの内容とは逆である。

②は、帝と殿が「同じ時期に夢を見た」という記述について、本文に根拠がない。また、「源氏宮の入内が決まつた」という結論が明らかかな誤りである。

③は、「殿に相談しても適切な意見が得られなかつたので」とする、占いに至るまでの経緯の説明が、IIの内容と異なる。

④は、源氏宮の処遇について「殿が……同意した」という記述がI～IVの内容に合わない。さらに、夢占いを無視した場合に「源氏宮に不吉なことが起こるかもしれない」という部分がIIIと異なる。

問6 内容に関する説明問題

14年度センター試験古文では、近年問6の定番となつていた表現と内容に関する説明問題ではなく、内容のみに関する説明問題が出題された。選択肢ごとに本文からの引用部分とそれについての説明を吟味し、本文と明

らかに異なる記述を確認していくとよい。

①は、「今さらに神も公も知り聞こえさせ給ふべきにあらず」（〔第一段落〕4行目）を、「自分でも源氏宮をどうすればよいのかわからなくなつた」とするのが間違い。この引用箇所の直後に「思しもかけたらず」とあるように、この時、殿は、源氏宮の入内を中止して斎院にするなど思いもよらない様子である。また、「御内裏参りやいかなるべきこといか」（〔第一段落〕2～3行目）についても、「源氏宮の入内を推し進めようとする人々の声」とは言えない。引用部分は「入内はどのようになるはずのことだろうか」と、源氏宮の入内が実現しないかも知れないという噂を述べているのだが、それを言う人々が、源氏宮の入内を推し進めようとしているのか、好ましくないと思っているのかは、本文に書かれていない。

②は、二箇所の引用部分（〔第二段落〕1行目・〔第二段落〕2行目）を帝の容姿についての記述だとする点が間違い。これらはいずれも源氏宮の容姿についての記述である。「宮の御かたち、このごろはいとど盛りに……」と源氏宮の容姿についての記述が、そのまま一箇所目の引用部分に続いているのである。二箇所目についても、「帝と申すとも……御目はおどろかせ給ひなむかし」と、帝が源氏宮を見て驚くだろうと述べている部分にあるため、源氏宮の容姿についてのものであることがわかる。

③は、「不審に思う母宮から強く聞いたため、恐ろしい夢を見たので厄除けの祈りをさせてほしい、と打ち明けた」とあるのが誤りである。

本文には「母宮にも聞こえさせ給はで」とあり、源氏宮は夢について母宮に話していない。また、「殿の内におびたしき物のさとし」（〔第二段落〕4～5行目）について、母宮が何らかの行動を起こしたとは書かれていないし、母宮の行動を受けて源氏宮が厄除けの祈りを希望したとも書かれていない。

④が正解。二つの引用箇所（〔第三段落〕2行目・〔第三段落〕4行目）

は、いずれも大将の心中部にあるので、この心中部を見てみよう（この箇所の大将の心情については、問4の解説も参照のこと）。心中部冒頭の

「とやかくやと身一つを思ひくだけながら」は、選択肢の「叶わぬ恋に苦しみ続け」に該当する。次に、引用箇所を含む「親たちの思しよらぬありますにて、ほのかに見奉りそめても」について、男が女を「見る」という場合、男女の契りを結ぶことを意味し、「ほのかに見奉り」とは、大将が源氏宮と契りを結ぶことを意味する。したがって、選択肢の「親たちの思しよらぬありさまにて」源氏宮と契りを結ぼうか」と大将が考えたという記述は正しい。さらに、本文では、そのように源氏宮と契りを結んだ場合に、「『さらば、さてもあれ』とは、必ず思し許さぬやうはよにあらじ」と、大将は考えている。「思し許さぬ」の主体は、大将の心中部で尊敬語が用いられていることや、大将と源氏宮との契りを許す立場にある人物だということから、大将の両親と考えられ、大将は、自分と源氏宮との関係について両親が許さないことは「よにあらじ（＝けつしてあるまい）」と考えているのである。これが、選択肢の「きっと両親に許してもらえるだろうと期待した」という内容と一致する。本文で、この部分に続く「御心のうちども」とは両親の心の内のこと、「明け暮れ思し乱れむ」の主体も両親と判断できるから、大将は、両親が自分たちの関係を許してくれる一方で、「思はずもあるかな（＝思いがけないことだなあ）」と思い乱れるだろうと思っているのであり、このことは、選択肢の「両親が苦しむことになるだろう」という記述と一致する。以上のことから、この選択肢の説明がすべて正しいとわかる。

⑤は、源氏宮が「『げに神代より筋ことなりける』（〔第三段落〕5行目）我が身の境遇を痛感」したというのが誤り。引用部分は、作者が大将の心情を述べるなかで、大将の視点に寄り添って源氏宮の宿命について説明した部分であって、源氏宮の自分自身に対する認識を示した部分ではない。また、「思ひかけずあさましきこと」（〔第四段落〕3行目）は、源氏宮が斎院に決まったこと（問5の解説参照）についての「世の中」の反応を述べた部分で、ここについても、選択肢が「源氏宮は……思い知った」と、源氏宮の心情として説明している点が間違いである。

第4問 漢文

【出典】

顧炎武 『亭林文集』全六卷。

顧炎武（一六一三～一六八二）は、明末清初の学者。江蘇昆山（現在の江蘇省昆山市）の出身。字は寧人、亭林と号した。

幼少から学間に励み、國家の典制（制度や規則）、天文、兵法、農業などの分野に精通したが、鄉試（各地方で実施される官吏登用の第一次試験）には合格できなかつた。清の南下により明が滅ぶと、反清運動に参加、清朝が中国本土を支配して以後も「國恩を忘れてはならない、異民族に仕えてはならない」との母親の遺言に従つて仕官せず、各地を周遊して見聞を広め、読書と著述に専念した。「經世の実學」（世の中の実際に役立つ学問）を唱え、清朝の考証学（古典を客観的に解釈して帰納的に結論を導くという方法で、文物制度を明らかにする学問）への道を開いた。代表作に『日知錄』『天下郡国利病書』などがある。『亭林文集』は、その書名のとおり顧炎武の文集である。テーマは多岐にわたり、その博学ぶりが窺える。本文は卷一「郡県論・八」から採つた。

【本文解説】

本文は、顧炎武の「郡県論」と題する全九編から成る連作評論の第八編である。南宋の文人、葉正則の言葉を枕にして、州や県における地方統治の問題点を指摘し、顧炎武自身の解決策を訴えた文章である。

顧炎武は、「州県統治の責任者である官（上級役人）には地位や役職の世襲が行われていないが、実務を担当する吏（下級役人）は地位や役職を世襲している」との葉正則の言葉に、「善乎、葉正則之言」と賛同の意を加えている。つまり、州県統治の問題点を端的に指摘した言葉として引用しているのである。次いで、下級役人の中でもとりわけ悪賢い者が民事・財政・司法の文書を管理する役人となつて州県の権力を牛耳つてゐることを指摘し、さらに、そうした状況が天下の大害であることを知りながら解決できないままである上級役人にも批判の矛先を向けてゐる。

以上の現況を踏まえて、筆者は、I 「州県の上級役人は担当の州県の比較的近隣（本文では「千里以内」と表現されている）の出身者であること」、

II 「州県の上級役人は地域の民事に通じてゐること」、III 「州県の上級役人は任期を終身とすること」という三つの条件を提示し、この条件が満たされれば、上下の職分も明確化し、法令や規則も簡略化され、民心も安定し、そして上級役人は十分に下級役人を統率できるようになって、州県の権力を下級役人が專横するという弊害は解消されるはずだと唱えている。要するに筆者は、州県の統治を、中央から派遣されて任期を務めるだけの者に任せることではなく、地域の事情に明るく地域に根差した者に長期にわたつて任せることを改めよと訴えているのである。

上級役人が長期間同じ役職につくという点については、それに伴う弊害もあるらうが、下級役人の悪弊に苦しんでいた州県の統治を、学者の立場から何とか改善しようとされていた顧炎武の議論にも一理あるだろう。

【書き下し文】

善きかな、葉正則の言や。曰はく、「今天下官に封建無くして吏に封建有り」と。州県の敝は、吏胥其の中に窟穴し、父是を以て之子に伝へ、兄是を以て之弟に伝ふるなり。而も其の尤も桀黠なる者は、則ち進みて院司の書吏と為りて、以て州県の権を掣す。上の人に其の天下の大害たるを知るも、去る能はざるなり。官をして皆千里以内の人にして、其の民事に習ひ、而してまたその身を終ふるまで之に任せしめば、則ち上下弁じて民吏定まらん、文法除かれて吏事簡ならん。官の力以て吏を御するに足りて余り有れば、吏其の官を把持する所以無して自ら其の法に循はん。昔人の所云は、吏其の官を把持する所云は、將に一旦にして尽く去らんとす。天下を治むるの愉快、孰れか此に過ぎん。

【全文解説】

よいものであるな、葉正則の言葉は。（葉正則は）言つてゐる、「今の世の中では上級役人には地位や役職の世襲はないが、下級役人には地位や役職の

世襲がある」と。(葉正則の言葉のとおり)州や県の悪弊は、下級役人が州や県を根城とし、父が子に自分の地位や役職を引き継がせ、兄が弟に自分の地位や役職を引き継がせていることである。さらに下級役人の中でもとりわけ悪賢い者は、昇進して地方の民事・財政・司法の文書を管理する下級役人となって、州や県の権力を掌握する。上に立つ人(=高官)は州や県のこうした状況が世の大きいなる害悪であることをはつきりと承知しているが、それを(それぞれの州や県の)千里以内に居住する人であり、地域の人民の事情に習熟しており、さらに生涯にわたってその(任せられた)役職を務めるのであれば、上級役人も下級役人も職分をわきまえ民心は安定するであろうし、わずらわしい法規も整頓されて下級役人の職務も簡素になるであろう。(そうやって)上級役人の力が下級役人を余裕をもつて統率することができるようにになれば、下級役人は自分の(上役の)上級役人を掌握する手段がなくなりて自然と法律に従うようになるであろう。昔の人の言う「百万頭もの虎や狼を民間に飼う」という状況は、すぐに跡形もなく消えうせるであろう。世を統治する楽しみは、これに尽きるであろう。

【重要語・基本句形】

(1)	重要語
○	以——ヲ
○	而——シテ
○	尤——モ
○	則——…
○	為——タリ
○	又——
○	不 ^可 能——
○	所 ^以 ——
○	足——
○	自——
○	所謂——
○	者——
○	一 ^旦 ——
○	尽——
○	過——(於)——
○	乎——
(2)	基本句形
○	無——
○	使——A
○	將——B
○	孰——
* ■	——がない
* ■	もしAがBしたら
* ■	いまにも——しようとする
* ■	るつもりだ
* ■	どちらが——しようか
* ■	い)(反語形)
* ■	「孰」と読む時は、「誰が」の意。

- を使って・で「手段」／——なので・で「理由・原因」／——を「目的語」
- しかし／さらに
- そして
- とりわけ・特に
- は、……〔主語などを示す〕
- ならば、……〔仮定条件を受ける〕／——なので、……〔確定条件を受ける〕／——になる

——である

——して、それで……・——して、そして……

——(することが)できない

さらに・そのうえ

十分に——できる・——に値する

——(する) 目的

——(する) 手段・方法

——(する) 理由・原因／——(する) 手段・方法

——(する) 自然に・当然

——(する) 一般に言われる・俗に言う「言葉の引用を示す」

——は・——の場合は「意味上の主語・話題主語を示す」

ある朝・ある日／すぐに・にわかに「短い時間」／

ひとまず

すべて・みな・すっかり

——よりもすぐれている

——であるな、——は「詠嘆形」

乎^ハ哉^カ

——がない

もしAがBしたら

いまにも——しようとする

——しそうだ／——す

るつもりだ

「再読文字」

どちらが——しようか(、いやどちらも——しな

い)(反語形)

- * ■ 「孰」と読む時は、「誰が」の意。
- * ■ (セ) は活用語の未然形、(シ) は活用語の連用形、(スル) は活用語の連体形、(スレ) は活用語の已然形、(ナル) は形容詞・形容動詞の連

「体形を、それぞれ表す。」

【設問解説】

問1 語の意味の問題

選択肢を見ると、(1)「御」、(2)「循」のいずれについても動詞としての意味を問われていることが分かるので、動詞としての意味に限定して考えればよい。

(1)「御」は、動詞としては「をさむ」「ぎよす」などと読んで、「統べる・てなずける・あやつる」、或いは「はべる」「用いる」などの意味があるが、①「勧告する」、③「抜擢する」、⑤「容認する」などの意味はない。④「処罰する」が、「統べる」とやや紛らわしいが、「統べる」は、「統御する・てなずける」という意味なので、「処罰する」とはやはり意味が異なる。したがって、②「統率する」が正解である。

(2)「循」には、動詞としては「したがふ(したがう・踏襲する)」「そふ(寄り添う)」「めぐる(あちこちとまわる)」などの用法があるが、①「加える」、③「慣れる」などの意味はない。また、④「逆らう」では、「循」と正反対の意味になってしまう。⑤「頼る」が紛らわしいが、「循」の目的語が「其法」であることを考慮すれば、排除できるだろう。したがって、②「従う」が正解である。やや難しい問題であるかもしれないが、傍線部を含む「自循^ラ其法^ニ」という句全体の意味を考えると判断しやすい。

問2 返り点と読み方の問題

設問箇所が白文である場合には、選択肢に頼り切つたり、やみくもに字の意味を拾い集めて文意を憶測したりするのではなく、基本句形や重要語に注目し、構造を正しく捉えることが肝要である。

まず、傍線部の冒頭に「使」が置かれていることに注目する。「使」が用いられている時には、「使^{しょ}A^{ヲシテ}B^シ」(AにBさせる)という使役形を想定してみると大切であるが、ここでは、傍線部の直後に条件を受ける

「則^{すはよす}」という語があり、(1)重要語の該当項目を参照)、さらに「則^チ」を含む「則上^チ下弁^{ジテ}而民志定^{マラン}」という句の末尾が、「定^{マラン}」と推量の形で読まれていることに留意する。つまり、傍線部は使役形ではなく仮定形であり、傍線部の直後の「則^チ」以下が仮定条件を受けた結論の句だと判断できることかがポイントである。(2)基本句形の該当項目を参照)。よつて、傍線部は「使^{レメバ}A^{ヲシテ}B^セ」と読み、「もしAがBしたら」という仮定の方向になる。また、「使」の直後に名詞「官」(上級役人)が置かれており、さらに「官」の直後は副詞「皆」であることから、「官」が「A」にあたり、「官をして」と読まなければならない。

以上をふまえて選択肢を検討してみよう。まず、①「使^{トカヒ}せしめば」、②「使せしめ」は、「使」が「使^{トカヒ}」と「しむ」の二つの意味になつており、適当でない。また、②と⑤は「官」の箇所をそれぞれ「官の……」、「官は……」と読んでおり、「官をして」という使役の表現を用いた仮定形の読み方に従つていないので、誤りである。

次に、③、④の末尾の読み方を確認する。ここで注意したいのが、傍線部とその直後の「則^チ」とのつながりである。先にも述べたように、ここでは、「則^チ」は仮定条件を受ける語として働いているから、傍線部全体が仮定条件となつていている。つまり、傍線部は「使^{レメバ}A^{ヲシテ}B^セ」の「B」の箇所が、「皆千里以内之人」「習其民事」「而又終其身任之」の三つの句から成つており、「使^{レメバ}A^{ヲシテ}B^シ、B^シ、B^シ」という構造になつてゐるのである。したがって、「而又終其身任之」の句を読んでから、「使」に返つて「……しめば」と読むことになる。

この点から検討すると、③は「習其民事」から「使」へと返つてしまつているうえ、「使」の読み方も「……しめ」と仮定条件の読み方になつていて、「官をして皆千里以内の人にして、其の民事に習ひ、而して又其の身を終ふるまで之に任せしめば」(もしも上級役人がすべて千里以内に居住する人であり、地域の人民の事情に習熟しており、さらに生涯にわたつて

その役職を務めるのであれば)と読んでいる④が正解である。

問3 書き下し文の問題

問2と同様に白文の訓読みが問われているので、まず、基本句形や重要語に注目し、構造を正しく捉える。注目するのは「無」と「所以」である。それぞれ「無^{なき}」、「所以^{ゆゑん}」という構造・読み方をとる語であるが、(1) 重要語 および (2) 基本句形 の該当項目を参照)、「無^{なき}」が「所以^{ゆゑん}」の箇所から考へる。「所以」の直後に「把持」とあるので、「所以^{ゆゑん}」と読みたくなるが、「把持」から「所以」に返ってしまうと、「其官」の処理が難しくなり、⑥のように「其の官あらば」などと「あらば」を送つて無理な読み方をせざるを得なくなってしまう。そこで「其官」を「把持」の目的語であると考えてみると、「把持」は「しっかりと握る・掌握する」という意味であるから、「所以^{ゆゑん}把持^{スル}其官^ヲ」と読み、さらに「所以^{ゆゑん}以^テ把持^{スル}其官^ヲ」の直前に「無」があることから、「無^{ナシ}所以^{ゆゑん}把持^{スル}其官^ヲ」という方向で読めば、「(下級役人は)自分の(上役の)上級役人を掌握する手段がない」という意味となり、文脈にも合致する。

ところで、「虎狼」(虎や狼)は餌食となる動物ばかりでなく、人をも傷つけ、時には食い殺してしまうことさえある猛獣である。そのような猛獣の「虎狼」を、しかも百万頭も人々の大勢暮らす民間で飼つたりすれば、地域の人民への被害は甚大なものとなろう。つまり、「養^フ三百万虎狼於民間」とは、人民が大きな被害を被つている状況を述べているのであり、そのような劣悪な状況について、筆者は「將^ニ一旦^{一時}而尽去^{クラン}」(すぐに跡形もなく消えうせるであろう)と推測しているのである。ここで、本文の論理の展開を確認してほしい。筆者は、州や県において「吏・吏胥・書吏(=下級役人)」が「官(=上級役人)」を差し置いて権力をほしいままにしていることの弊害について詳述したうえで、筆者自身の解決策を訴えているのである(【本文解説】を参照)。したがって、傍線部の「虎狼」が、州や県の人民を苦しめている「吏・吏胥・書吏」を喻えたものであることは明らかであろう。よって、正解は①「吏胥」である。

『史記』項羽本紀に「夫秦王有^リ虎狼之心」(あの秦王は虎狼「のようないくに殘忍な」心を持っている)という一節がある。漢文では、「虎狼」が「欲深く殘忍な者」の喻えとして用いられることがあるので、これを機に併せて確認しておこう。

問4 比喩の問題

「虎狼」という喻えによつて筆者が指示しているものを問う問題であるから、まず、傍線部を含む一文の意味を正しく解釈し、その解釈を踏まえて「虎狼」が指すものを考へる。

傍線部「虎狼」を含む一文の前半「昔人所謂養^フ三百万虎狼於民間者」

問5 解釈の問題

解釈の問題であるが、送り仮名が省略されているので、重要語や基本句

形に留意しつつ、返り点を手がかりにして傍線部の句の構造を正しく捉え、一応の解釈をしたうえで、選択肢を検討する。

留意すべきは、「将」、「一旦」、「尽」の用法・意味である。「将」には、名詞として「将」（軍を率いる長・將軍）、動詞として「ひきる」（率いる）、副詞として「はた」（それとも・あるいは）など様々な用法があるが、傍線部では一・二点を施して「去」から「将」に返って読むように指示してあるので、名詞や副詞としての用法は除外して考えてよい。さらに選択肢を確認すると、「率いる」の意味に相当する語を含んだものは見当たらない。したがって、ここでの「将」は再読文字「将」（いまにもしようとする・——しそうだ）】（2）**基本句形** の該当項目を参照）であると判断する。

そこで、まず再読文字「将」の意味に注目して選択肢を検討する。①「……（する）べきである」は「當」・「應」の意味である。②「……（する）のがよい」は「宜」の意味である。④「……（する）わけではない」は、再読文字「将」の完全な誤訳である。⑤「……（する）必要がある」は「須」の意味である。結果的に正解の候補として残るのは、③「すぐに跡形もなく消えうせるであろう」だけであるが、念のために「一旦而尽去」の部分の解釈についても確認する。③は「一旦」を「すぐに」と解釈しているが、確かに「一旦」は短い時間の喩えの語として「すぐに・にわかに」という意味で用いられることがある（1）**重要語** の該当項目を参照）。接続語「而」を挟んで、「尽去」の解釈は、動詞「去」を副詞「尽」が修飾している構造を捉えられれば、「尽」には「すべて・みな・すっかり」という意味があるので、跡形もなく消えうせる」という解釈は正しいと分かる。さらに、傍線部直前の句「昔人所謂養百万虎狼於民間者」（昔の人の言う「百万頭もの虎や狼を民間に飼う」ということは）との意味のつながりも正しく（問4の解説を参照）、文脈が成立する。

以上から、傍線部は「すぐに跡形もなく消えうせるであろう」と解釈でき、「将」、「一旦」、「而尽去」と読むことが分かる。したがって、正解は③である。

問6 読み方と筆者の主張の説明の問題

いずれの選択肢にも傍線部Eの読み方と解釈が提示されているので、まず傍線部の読み方と解釈の成立するものを選び、そのうえで筆者の主張の説明を検討すればよい。

傍線部Eの前半「治天下之愉快」については、①、②の「天下の愉快を治むる」→「統治が安定している地方」、および③、④、⑤の「天下を治むるの愉快」→「世を統治する楽しみ」という二種類の読み方と解釈に分かれている。このうち、①、②の「統治が安定している地方」という解釈は、かなり唐突な感があるものの、文脈からは成立しそうで、一見判定しにくいかもしれない。そこで、後半の「孰過於此」の読み方と解釈を考える。

まず、「孰」は「孰（どちらか・どれか）」、あるいは「孰（誰が）」という用法のある疑問詞であるから、「孰過於此」は疑問形か反語形かのどちらかであると判断できる。ところで、本文は州や県において下級役人が権力を専横している弊害を述べたうえで、筆者が自身の解決策を提示した文章である（【本文解説】を参照）から、本文末尾の一文である傍線部Eは、筆者の議論の結びとなっているはずなので、疑問形ではなく反語形であると判断したい。

そこで、反語形を念頭に置いて選択肢を検討する。反語形の句末・文末の読み方は「未然形十ん（+や）」であるから、①「孰か此を過たん」、⑤「孰れか此に過ぎん」は、どちらも反語形の読み方として成立するが、②「孰か此を過ぐる」（文末が「連体形」と④「孰か此に過るや」（文末が「連体形十や」）は疑問形の読み方であり、⑨「孰れか此に過ぎんか」（文末が「未然形十ん十か」）は疑問推量の読み方であるから、いずれも不適

切である。

よつて、傍線部後半を反語として読んでいる①と⑤を検討する。

①「この文は、『天下の愉快を治むる、孰か此を過たん』と訓読し、『統治が安定している地方なら、誰も誤りを犯したりはしない』と述べる筆者は、『吏胥』が『州県之権』を独占することを問題視しつつも、それを排除する手立ては容易に見つかるものではないと解決の難しさを指摘している」は、「『吏胥』が『州県之権』を独占することを問題視しつつも、それを排除する手立ては容易に見つかるものではないと解決の難しさを指摘している」という説明によって、州や県の弊害を認識しつつも、半ば解決を放棄し、解決策の提示を断念したという内容になり、本文の議論の展開とは方向の違った理解になってしまいます。

⑥「この文は、『天下を治むるの愉快、孰れか此に過ぎん』と訓読し、『世を統治する楽しみは、これに尽きるであろう』と述べる筆者は、『吏胥』の『州県之権』を排除し、地域の事情に通じた官が『吏胥』を適切に管理することができてこそ善政がもたらされると唱えている」では、「『吏胥』を適切に管理することができてこそ善政がもたらされると唱えている」とまとめている。本文では、傍線部A「使メバ官ヲシテ皆千里以内之人ニシヒ其民事ニシテ又終フルゴト其身ヲ任セ之ヲ」（もしも上級役人がすべて千里以内に居住する人であり、地域の人民の事情に習熟しており、さらに生涯にわたつてその役職を務めるのであれば）以下で弊害の具体的な解決策について議論を起こし（問2の解説を参照）、傍線部Eの直前の傍線部Dで「將ヒサシテ一旦ヒシテ而ハシテ去ル」（すぐに跡形もなく消えうせるであろう）と、自身の解決策に從えば弊害が解消すると述べている（問4および問5の解説を参照）のだから、本文の筆者の議論と何ら矛盾しない。

問7 理由説明の問題

筆者が本文冒頭に葉正則の言葉を引用した意図については、葉正則の言

葉の内容を押さえたうえで、本文の論の展開に沿つて考えなければならぬ。

葉正則の「今天下官無ニクシテ封建ニリ而吏有ニリ封建」いう言葉は、「今の世の中では（中央から派遣される）上級役人（の世界）には地位や役職の世襲はないが、（現地採用される）下級役人（の世界）には地位や役職の世襲がある」と解釈できる。この葉正則の言葉を、筆者は本文冒頭で「善乎、葉正則之言」（よいものであるな、葉正則の言葉は）と肯定している。そして、この言葉をふまえて、議論は以下のように行開されている（【本文解説】を参照）。

現地採用の下級役人が地位や役職を世襲していることを、州や県の弊害として把握（「州県之敝」）。

←
州や県の弊害について具体的に詳述（「吏胥窟くつ穴あな其中ノニ」から「而不レ能ハル去ル也」まで）。

↑
筆者自身の弊害解決策の提示と説明（「使メバ官ヲシテ皆千里以内之人ニシヒ」から「孰過ハカギ於此ニ」まで）。

以上を踏まえて選択肢を検討する。

②「筆者は葉正則の言葉に感銘を受けて、自分の主張の結論としようとしている」は、前半「葉正則の言葉に感銘を受けて」は本文の内容と矛盾しないが、筆者は本文末で解決策を提示しているのだから、後半の「自分の主張の結論としようとしている」が誤りである。

③「筆者は葉正則の言葉に共感しつも、反論の余地を見出そうとしている」は、前半「葉正則の言葉に共感し」は誤りではないが、後半「反論の余地を見出そうとしている」が、筆者は自分の議論の導入としようとしているのであって反論を試みているわけではないのだから誤りである。

④「筆者は葉正則の言葉に疑問を抱きながらも、自分の考察の論拠にし

ようとしている」は、筆者は葉正則の言葉を肯定しているのだから、前半「葉正則の言葉に疑問を抱き」が誤りである。

⑤「筆者は葉正則の言葉に反発を覚えたため、徹底的に批判の対象にしようとしている」は、前半「葉正則の言葉に反発を覚えた」、後半「批判の対象にしようとしている」も、ともに本文の展開に沿った説明となつて向ではないので誤りである。

①「筆者は葉正則の言葉に納得して、自分の議論の出発点としようとしている」は、前半「葉正則の言葉に納得して」、後半「自分の議論の出発点としようとしている」も、ともに本文の展開に沿つた説明となつてゐる。

したがつて、正解は①である。